病院施設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市

水橋荒町遺跡

1997年10月

富山市教育委員会

序

富山市は、東に立山連峰を望み、北は日本海、西には呉羽山丘陵を擁する風光明媚な土地であります。恵まれた大自然の中で先人が残した貴重な文化財は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であり、これを保護し、未来へ継承していくことは、現代の私たちの責務といえます。

富山市内には約600か所にわたる遺跡があります。近年、市の北部地区では各種開発に伴って数多くの遺跡の発掘調査が行われ、古代の集落の姿が次第に解明されつつあります。

特に水橋地区におきましては、平安時代の文献に水橋駅が所在したことが記されるなど、古代の交通の要衝として注目すべき地域であります。

中でも水橋荒町（みずはしあらまち）遺跡は、過去の発掘調査で、奈良時代の大形建物跡や数多くの井戸が発見されており、役所的な施設があったと推定されるなど、重要な成果をあげております。

このたび、本委員会では、病院建設に先立ってこの遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、奈良時代及び鎌倉～室町時代に営まれた集落跡が発見され、奈良時代の広大な集落群の南限を確認できたことは、遺跡の性格を明らかにする上でも大きな成果といえます。

この調査成果をまとめた本書が、私たちの財産である埋蔵文化財を理解していただく上で参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました野村病院　野村幸男氏をはじめ、地元水橋地区並びに各関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成９年10月

富山市教育委員会

教育長　大島　哲夫

例　　言

1．本書は、富山県富山市水橋辻ヶ堂480番地内に所在する水橋荒町遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、病院施設建設工事に伴い、野村病院（院長　野村幸男）の依頼を受けて実施した。

3．調査は、富山市教育委員会が主体となり実施した。調査にあたっては、山武考古学研究所（平岡和夫、桐谷　優、常深　尚）が富山市教育委員会の指導の基に実施した。

調査期間　調査面積、担当者は下記の通りである。

試掘調査　期間　平成８年３月26日～同年３月28日

面積　124.5㎡（対象面積　15,143㎡）

担当　富山市教育委員会生涯学習課　主任学芸員　古川知明

本 調 査　期間　平成８年６月24日～同年７月31日

面積　820㎡

担当　富山市教育委員会生涯学習課　主任学芸員　古川知明

山武考古学研究所　平岡和夫、桐谷 優、常深 尚

4．整理調査及び本書の編集は桐谷が担当し、金子浩美・江口弘子の協力を得た。

5．発掘調査により得られた資料は、全て富山市教育委員会に保管してある。

6．本書の執筆分担は下記の通りである。

第Ⅰ章　古川知明　第Ⅱ～Ⅵ章　桐谷　優

7．発掘調査から報告書刊行に至るまで、以下の方や関係機関に御指導・御協力いただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

小野正敏、㈱ビルド、開成測量㈱、㈱日本テクニカルセンター

8．発掘参加者は下記の通りである。（順不同、敬称略）

久保田あさこ・菅田義一・宮城桂子・竹内畠子・吉田史子・西野昌子・前田絹枝・前田コト・林ミツイ尾崎一男・井上宗作・矢渕澄子・新鞍キミエ・菅田ハルエ・菅田輝子・長井初枝・押田百合子・魚住弥三松

凡　　例

1．調査で使用した略号・記号については下記の通りである。

ＭＡ：水橋荒町遺跡　　ＳＤ：溝　　ＳＢ：掘立柱建物跡

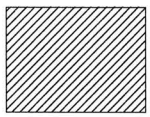
ＳＫ：穴　　ＳＥ：井戸跡

2．平面図に示した北方向は、真北を示す。

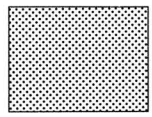
3．遺跡位置図（第１図）は国土地理院50,000分の１『魚津』を使用し、調査区周辺の地形図（第４図）は富山市基本図2,500分の１を使用した。

4．遺物番号は、本文・挿図・図版番号共に一致している。

5．遺構・遺物の挿図に使用したスクリントーンは、以下の通りである。


地山

煤・炭化


赤彩

目　　次

序
例　言
凡　例

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と周辺の主な環境……1
Ⅲ　調査の方法と経過……5
Ⅳ　基本層序……5
Ⅴ　遺構と遺物
　A．遺構……7
　B．遺物……15
Ⅵ　まとめ……21
報告書抄録

表　目　次

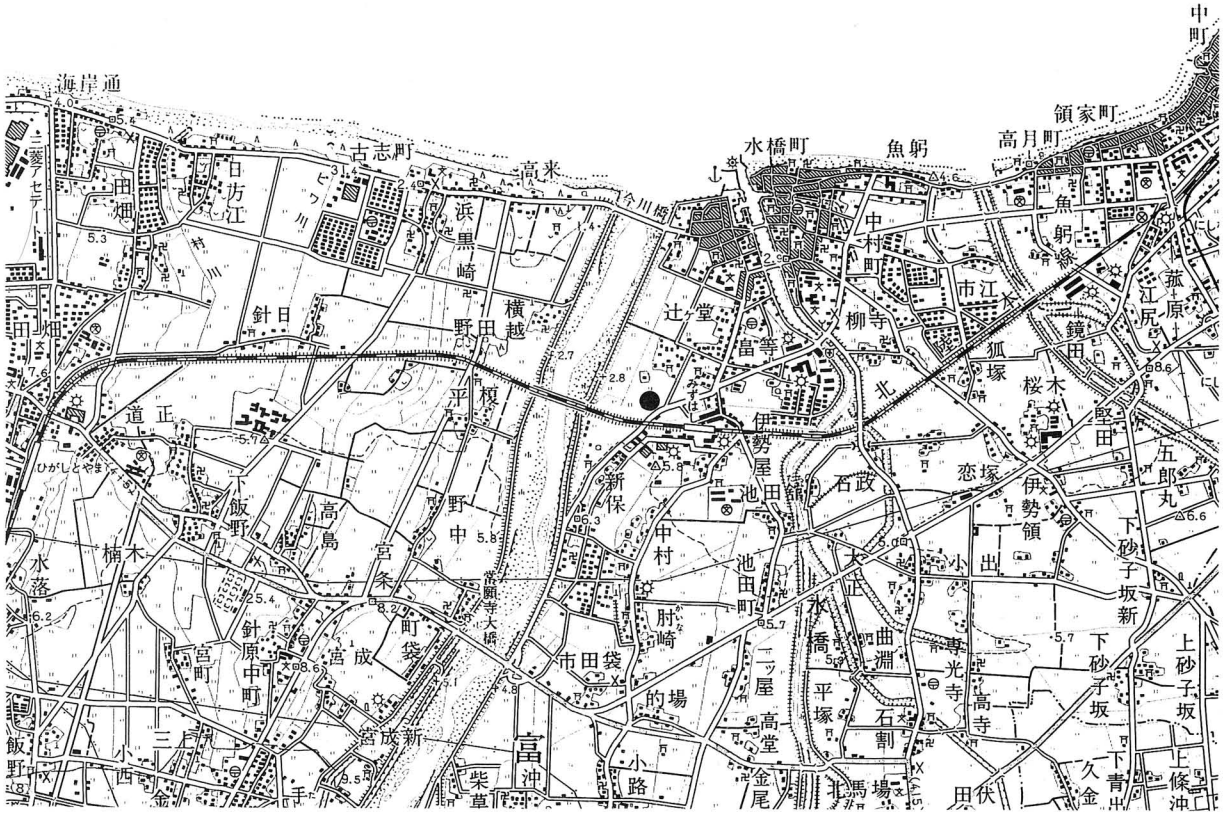
表1　周辺の遺跡一覧……3

挿　図　目　次

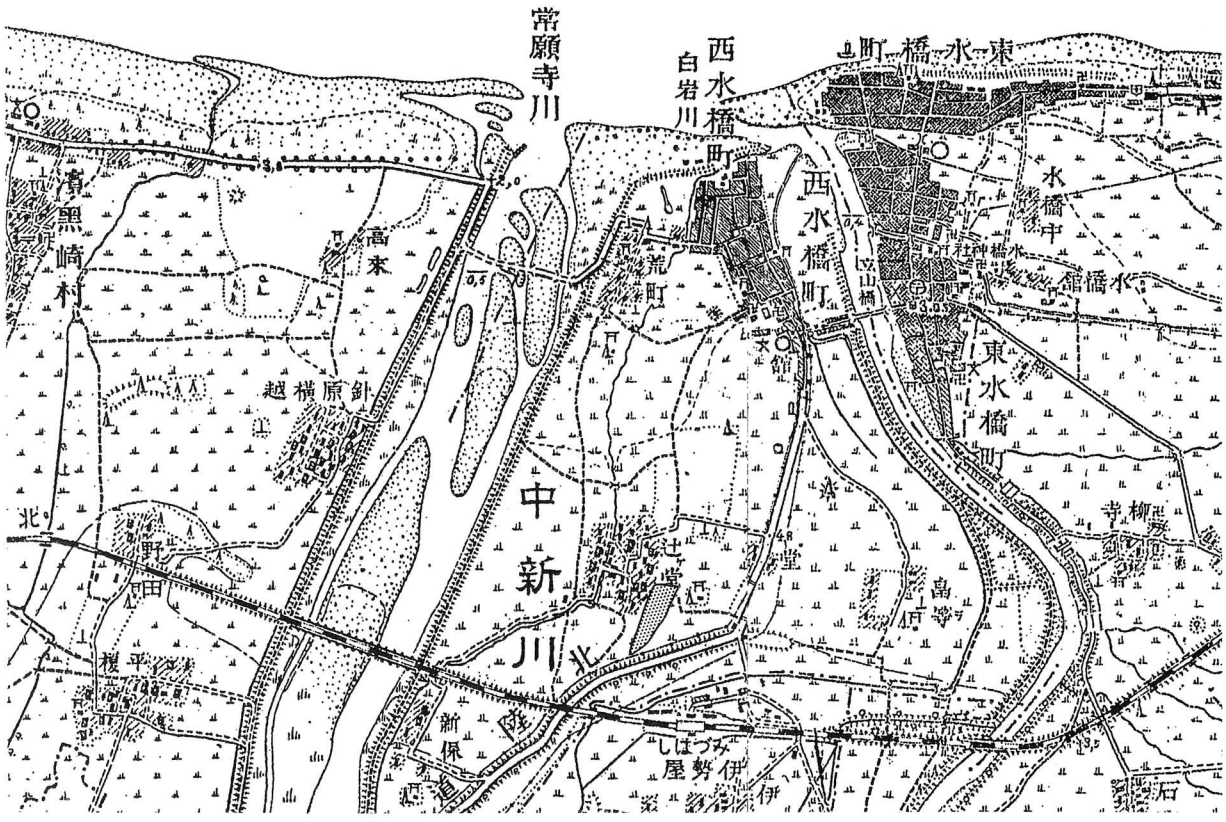
第1図　水橋荒町遺跡位置図
第2図　大日本帝國陸地測量部　假製版
　　二万分一地形図『滑川』『東岩瀬』
第3図　水橋荒町遺跡と周辺の主な遺跡……2
第4図　調査区の位置と周辺の地形図……4
第5図　基本層序模式図……5
第6図　遺構全体図……6
第7図　ＳＢ１・２……7
第8図　ＳＤ１・２……8
第9図　ＳＤ３・４……9
第10図　ＳＥ１・２・４～７・９……10
第11図　ＳＥ10～12・14・15……11
第12図　ＳＫ３・８・１３……13
第13図　ＳＤ１・２出土遺物実測図……14
第14図　ＳＤ２、ＳＥ１・２・４出土遺物実測図16
第15図　ＳＥ５～７・10・11・15出土遺物実測図18
第16図　ＳＫ13、包含層出土遺物実測図……19
第17図　包含層出土遺物実測図……20

図　版　目　次

図版1　1．調査区遠景　（空　撮）
　　2．調査区全景　（空　撮）
図版2　1．ＳＢ１・２、ＳＤ１　（空　撮）
　　2．ＳＤ１、ＳＢ１・２　（北より）
　　3．ＳＤ１断面　（東より）
　　4．ＳＤ２　（東より）
　　5．ＳＤ２断面　（北より）
図版3　1．ＳＤ３、ＳＥ１５　（東より）
　　2．ＳＥ１　（東より）
　　3．ＳＥ２　（東より）
　　4．ＳＥ４　（北より）
　　5．ＳＥ５　（南より）
　　6．ＳＥ６　（東より）
　　7．ＳＥ７　（南より）
　　8．ＳＥ７近景
図版4　1．ＳＥ９　（南より）
　　2．ＳＥ１０　（南より）
　　3．ＳＥ１１　（南より）
　　4．ＳＥ１２　（北より）
　　5．ＳＥ１４　（北より）
　　6．ＳＫ１３　（北より）
　　7．ＳＢ１・２　（東より）
　　8．ＳＫ３　（東より）
図版5　ＳＤ１・２出土遺物
図版6　ＳＥ１・２・４～６出土遺物
図版7　ＳＥ７・10・11・15、ＳＫ13、
　　包含層出土遺物



第１図　水橋荒町遺跡位置図（1：50,000）平成３年11月１日発行



第２図　大日本帝國陸地測量部　假製版　二万分の一地形図『滑川』『東岩瀬』　明治四十四年六月三十日発行

Ⅰ．調査に至る経緯

水橋荒町遺跡は、富山市教育委員会が昭和63年度から平成３年度まで実施した市内分布調査の結果新たに発見された遺跡である。

平成３～５年度には遺跡の西部で市下水道建設課が主体となる水橋浄化センター建設に伴って発掘調査が実施され、奈良時代を主とする集落跡が検出された。これらは建物規模が大きく、また石帯の出土などから官衙的施設あるいは寺院等に関連した施設ではないかと推測された。

平成８年１月、野村病院（院長　野村幸男）から病院施設建設に伴う埋蔵文化財所在確認依頼が提出された。建設予定地の一部分が水橋荒町遺跡南部の概略範囲に含まれていたため、協議の上試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成８年３月26日と27日の２日間で行い、対象とした15,143㎡の内2,470㎡に弥生時代及び奈良時代の遺構・遺物が発見された。

調査では、土坑や溝が検出され、その中からは主として奈良時代の土師器・須恵器が出土した。土坑は直径30㎝程度のもので建物の柱跡と考えられた。これらの遺構群の南側には激しい湧水のある粗砂層が広がっており、常願寺川の旧流路の痕跡と考えられた。このことから遺跡は、旧流路に面して形成された奈良時代の集落跡であると考えられた。

この結果に基づき、埋蔵文化財範囲の保護措置について協議したところ、遺跡範囲が工事区域の西端部であることから、一部を駐車場及び緑地として利用することとし、建物部分にかかる820㎡について発掘調査を実施することとなった。

調査は、富山市教育委員会が調査主体となり、その指導のもと山武考古学研究所（所長　平岡和夫）が実施することで合意し、平成８年６月市と野村病院の間で協定が締結された。

ここでは、発掘調査を平成８年６月24日から７月30日まで実施し、引渡し完了後引続き出土品整理を１か年で行うこととした。

調査は６月24日に着手し、予定どおり７月30日までに完了し、終了確認をへて７月31日付けで調査区域の引渡しを完了した。

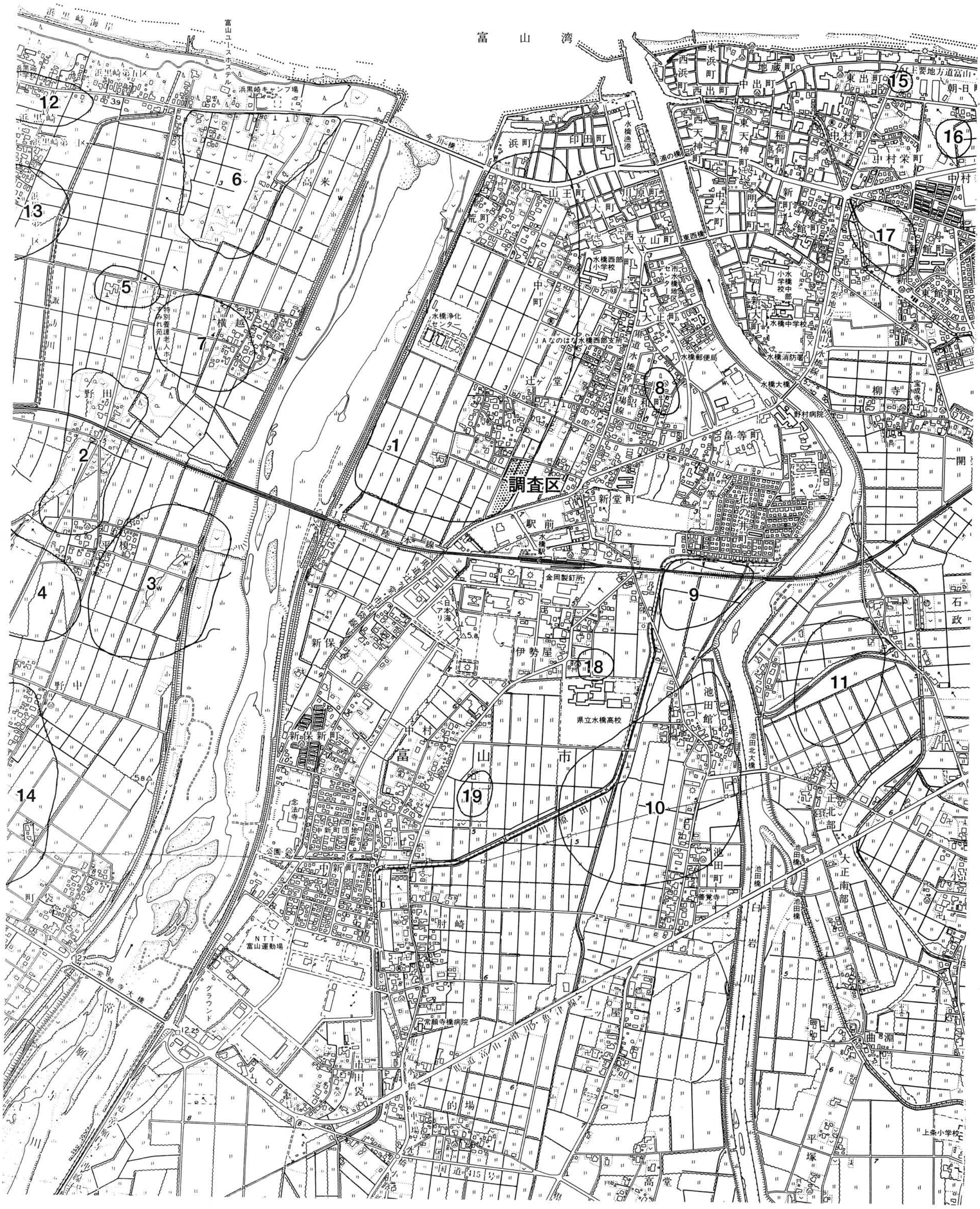
Ⅱ．遺跡の位置と周辺の主な遺跡

１．遺跡の位置

水橋荒町遺跡（市遺跡番号44）は、市街地から北東約10㎞、北陸本線水橋駅から北東約600ｍ地点に位置し、常願寺川と白岩川に挟まれた標高2.5ｍの扇状地の末端部に立地する。

現在周知されている遺跡面積は579,000㎡に及ぶ広大な範囲で、これまでの発掘調査により、縄文時代中期から近世に亘る大規模な複合遺跡であることが判明している。この中で主体となるのは奈良・平安時代であり、官衙的様相を示す大型の掘立柱建物群や遺物が多数検出されている。

当遺跡は、この様な遺跡の南東端にあたり、南側には県道辻ヶ堂・市田袋線が走行している。



第３図　水橋荒町遺跡と周辺の主な遺跡（1：20,000）

2．周辺の主な遺跡

遺跡周辺には、縄文時代前期から近世に亘る営みが窺えられるが、主体となるのは奈良・平安時代と考えられる。従来、富山平野の形成は縄文時代後期から晩期と考えられていたが、平成３～４年度にかけて実施した水橋荒町遺跡の発掘調査で出土した縄文時代中期後葉の土器により、富山平野の形成がそれ以前であることが判明している。また、縄文時代の遺跡は、概して常願寺川左岸に多く認められ、扇状地末端部及び白岩川右岸では希薄である。

常願寺川左岸では、縄文前期～近世の野田・平榎遺跡（２）、縄文後期～古墳前期の野田Ⅱ遺跡（３）、縄文後期～近世の野中新長幅遺跡（４）、古墳前期～奈良・平安の平榎亀田遺跡（５）、奈良・平安の高来遺跡（６）、奈良・平安～近世の横越遺跡（７）等が知られている。

当遺跡が立地する扇状地末端部では、奈良・平安～中世の水橋畠等遺跡（８）、水橋伊勢屋Ａ遺跡（９）、古墳～中世の水橋池田館遺跡（10）が顕著であり、各遺跡とも水橋荒町遺跡との相互関連が想定される。

白岩川右岸では、縄文後期・奈良・平安・中世の水橋石政遺跡（11）が代表的である。

表１　周辺の遺跡一覧表

	種別	名称	所在地	時代	出土遺物	備考
1	集落跡	水橋荒町	水橋荒町、水橋辻ヶ堂、水橋辻ヶ堂字荒町・米作・今川・畑三番割・苗代・牛毛・飯田・天神・鈴木割・水橋川原町字茂平田	縄文（中～晩）・弥生・古墳（前・後）・白鳳・奈良・平安・中世	縄文土器・石器（打製石斧・磨製石斧）弥生土器・土師器・須恵器・土錘・石製・帯・砥石・鉄滓・土師質土器・珠洲焼・青磁・井戸枠・木杭・曲物・木簡・墨書土器	1990・1991年試掘調査 1991・1992年発掘調査
2	散布地	野田・平榎	野田字大畑割・平均割・早稲田割・平榎字一番割・浜黒崎字五百苅・御馬渡・福島、野田字砂畠割・戸尻割・市水口割、平榎字屋敷割・執行田割・四郎左割	縄文（前・中・後・晩）弥生・古墳（前）・奈良・平安・中世	縄文土器・石器（磨製石斧・打製石斧等）・土製品・土師器・須恵器・土錘・鉄滓・珠洲焼・越前系陶器ほか	県台帳では平榎遺跡伝平榎城推定地を含む 1985年試掘調査
3	散布地	野田Ⅱ	野田字戸尻割、浜黒崎	縄文（後・晩）・弥生・古墳（前）	縄文土器・弥生土器・土師器	
4	散布地	野中新長幅	野田字前田・餅田・古屋敷割、宮条字長幅割、平榎字対江割・石尾丸割・大畑割、浜黒崎字御馬渡	縄文（後）・弥生・古墳（前）・奈良・平安	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	弥生～古墳主体
5	散布地	平榎亀田	平榎字北早稲田割・南早稲田割・屋敷東割・畔下割・一番割・亀田割・屋敷割、横越	古墳（前）・奈良・平安	土師器・須恵器	
6	散布地	高来	高来字西割、浜黒崎字高来畑	奈良・平安	土師器・須恵器・土錘	
7	散布地	横越	横越、横越字屋敷	奈良・平安・中世・近世	土師器・須恵器・土師質土器・近世陶器	奈良・平安主体
8	散布地	水橋畠等	水橋辻ヶ堂字池田、水橋畠等字宮の北・宮の南・西狭場	弥生・古墳・近世	弥生土器・古式土師器・越中瀬戸焼	奈良・平安主体
9	散布地	水橋伊勢屋Ａ	水橋伊勢屋、水橋池田舘字打の宮	奈良・平安・中世	土師器・須恵器・珠洲焼	
10	散布地	水橋池田館	水橋池田館字打の宮、水橋伊勢屋、水橋池田町、水橋中村、水橋肘崎	古墳・奈良・平安・中世	土師器・須恵器・珠洲焼・土師質土器	奈良・平安主体
11	散布地	水橋石政	水橋石政、水橋大正字大正割	縄文（晩）・奈良・平安・中世	縄文土器・土師器・須恵器・土師質土器	
12	散布地	浜黒崎町畑	浜黒崎字町畑・高来畑・松下	奈良・平安	土師器	
13	散布地	浜黒崎飯田	浜黒崎字飯田	奈良・平安・中世・近世	土師器・須恵器・珠洲焼・土師質土器・近世陶器	1992年試掘調査
14	散布地	宮条南	宮条字早稲田割・南割・坊丸割・花子免割・野寺割・浦野割、野中字前田、町袋	縄文（後～晩）・弥生（中）・古墳（前）・平安・中世・近世	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・珠洲焼・鉄滓・近世陶磁器	
15	散布地	水橋東出町	水橋町字出町、水橋中村町字九門・宮田	奈良・平安	土師器	
16	散布地	水橋朝日町	水橋舘町字下柳町、水橋市江、水橋中村町	弥生・奈良・平安・中世	弥生土器・土師器・須恵器・土錘・珠洲焼・土師質土器	
17	散布地	水橋永割	水橋舘町字中田・早稲田・苗代・樋掛田・達戸・養道寺	平安・近世	土師器・須恵器・越中瀬戸焼	
18	散布地	水橋伊勢屋Ｂ	水橋伊勢屋、水橋中村	中世	土師質土器	
19	散布地	水橋中村	水橋中村	奈良・平安	土師器・須恵器	

第４図　調査区の位置と周辺の地形図（1：2,500）

Ⅲ．調査の方法と経過

1．調査の方法

遺跡地は、既に市教育委員会により試掘調査が実施されており、遺構確認面までの深度、出土遺物、遺物包含層の有無・位置が詳細に把握されていた。したがって、本調査はこの試掘成果を踏まえて実施した。

調査はまずバックホーを導入し、耕作土（第１層）を除去した。第２層の黒色土は部分的に遺物を包含しており、その箇所は人力で掘り下げた。遺構確認面である第３層に達した時点で、遺構検出作業及び水準測量・公共座標（５×５ｍ）の設定を行った。座標杭には、北から南へ１・２・３……、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ……と呼称を付し、各北西隅の杭呼称をそのままグリッドの呼称として用いた。遺物包含層からの出土遺物は、層位を確認して一括して取り上げた。

遺構の掘り下げは、土層観察を行いながら慎重に掘り進めた。遺構内出土遺物については、可能な限り出土位置・高さを記録するように努めたが、調査区内は脆弱かつ湧水が著しく記録は困難を極めた。

遺構実測図は、断面図が１／20、平面図はトータルステイションによった。

写真撮影は、３台のカメラ〔35㎜（白黒・リバーサル）・６×７（白黒）〕を使用し、各段階に於て随時実施した。更に、全体写真撮影はラジコン・ヘリコプターによる空撮を実施した。

2．調査の経過

本調査は、平成８年６月24日から同年７月31日まで実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

６月期　24・25日　発掘施設の設営。26～28日　現況写真撮影の後、調査区の北側より表土掘削を開始し、併せて調査区周縁に排水溝を設ける。

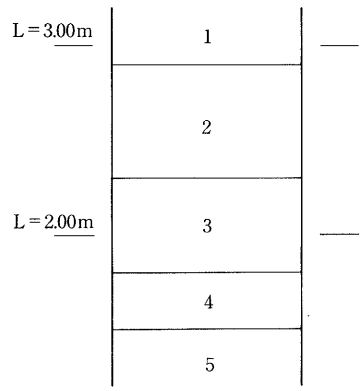
７月期　１～９日　表土掘削と包含層調査を併せて実施する。10日　遺構検出作業とSD１の掘り下げを開始し、調査区内に座標設定と水準測量を行う。11～18日　遺構調査を継続。18日に調査区北側半分の調査を終了し、市教育委員会より北側の終了確認を得る。19日北側の空撮を実施する。20～25日　調査区南側の遺構調査を継続する。26日　遺構調査を終了し、市教育委員会より終了確認を得る。27～30日　遺物・図面・写真等の残務整理。31日　発掘器材の撤収を行い、調査の全てを終了する。

Ⅳ．基本層序

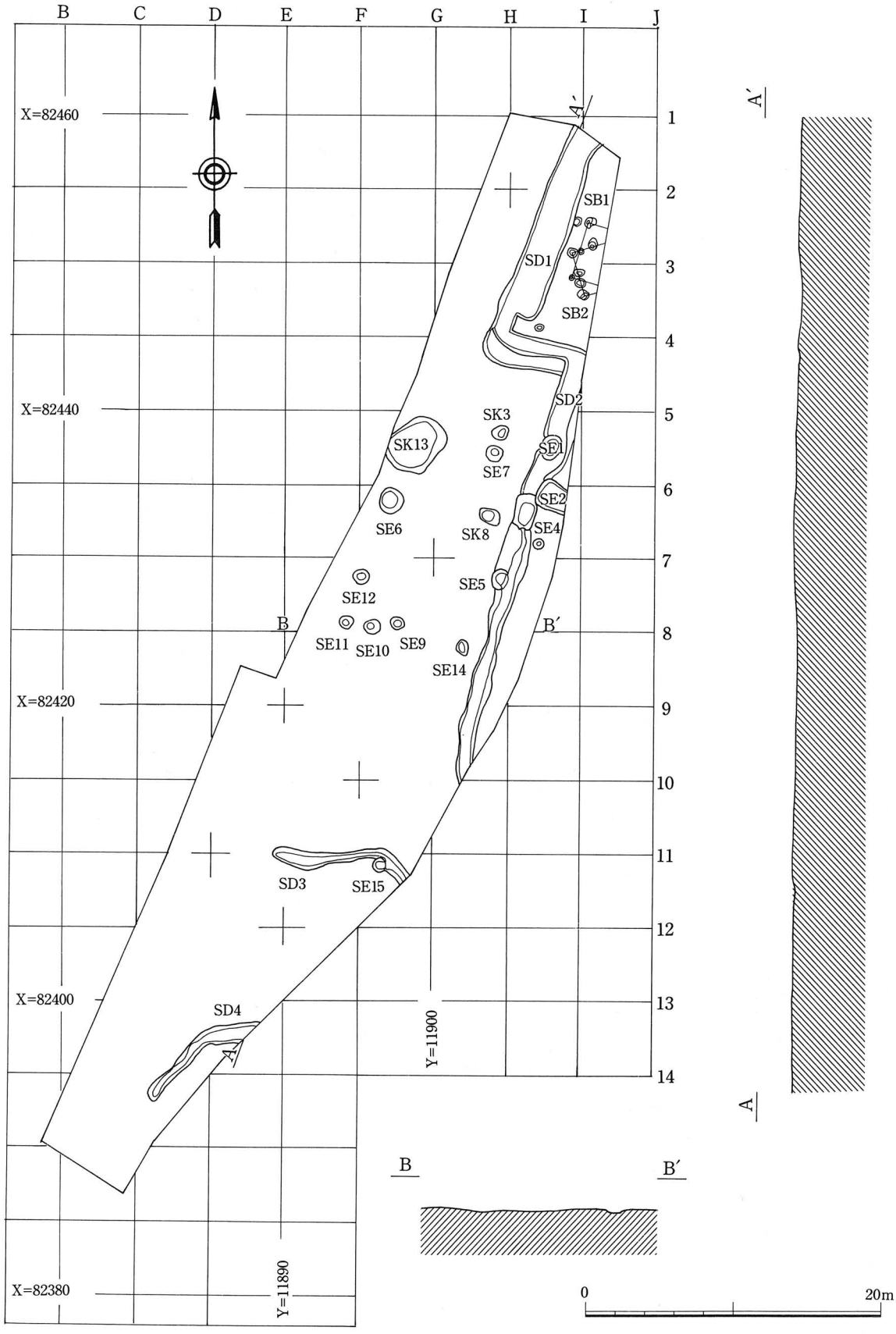
当調査区は、水橋荒町遺跡の南東端に位置し、標高約１ｍを測る低湿地で地目は水田である。調査区の南東側は湿地ラインに一致し、それ以南は旧常願寺川河川敷と考えられ、粗砂の堆積や激しい湧水地帯となっている。

基本的な堆積は以下の通りである。

１．水田耕作土　層厚約30㎝
２．青灰色砂土　層厚約60㎝
３．黒色粘質土　層厚約50㎝（遺物包含層）
４．青灰色粘土　層厚約30㎝（遺構確認面）
５．オリーブ灰色粘土（地山）



第５図　基本層序模式図



第6図　遺構全体図（1：400）

Ⅴ．遺構と遺物

当遺跡地は、水橋荒町遺跡の南東端にあたる820㎡の範囲である。検出された遺構は、掘立柱建物２棟、溝４条、井戸跡11基、土坑２基であり、遺物は古代と中世を主体とし、弥生時代及び近世の土器が極少量ながら得られている。

Ａ．遺構

１．掘立柱建物

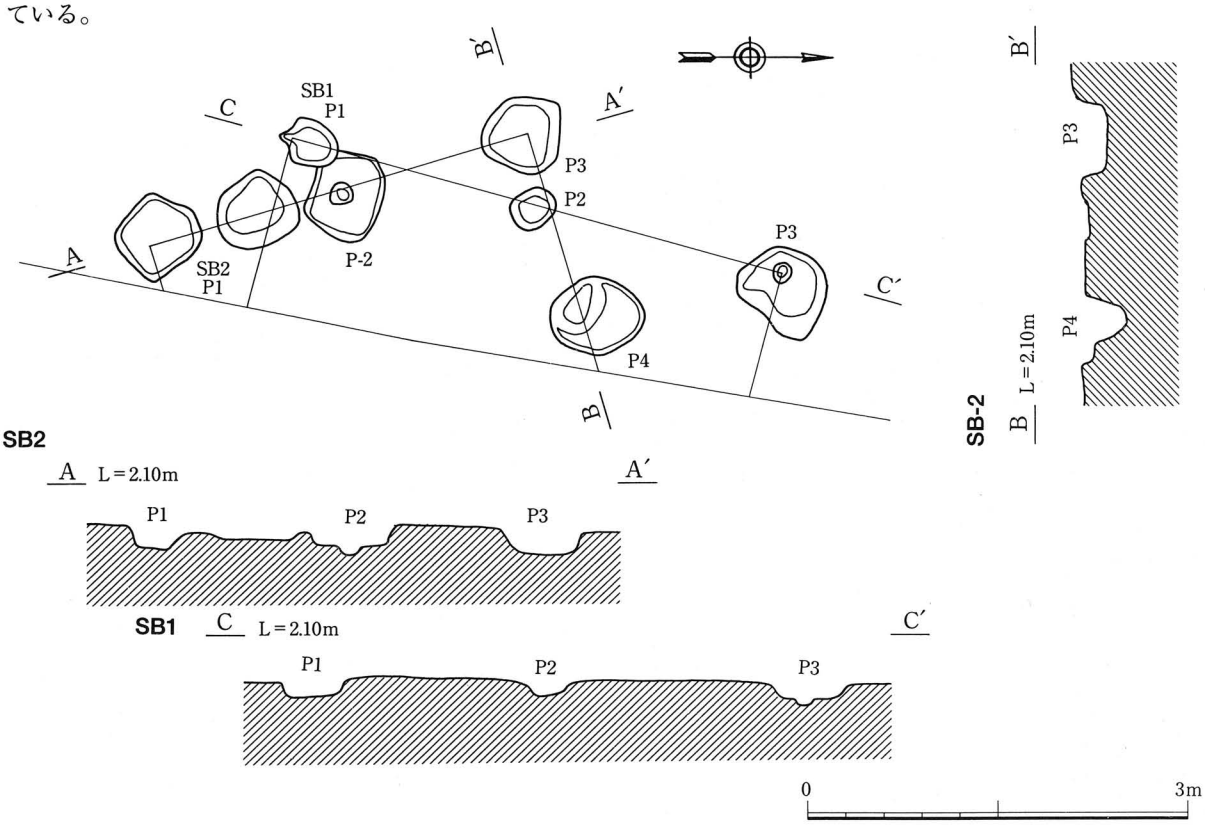
ＳＤ１に囲繞される２棟の建物を想定した。遺構の大半は調査区外に延びており、柱痕は捉えきれなかったが、柱の「アタリ」と考えられる硬化部が幾つかの柱穴より確認されている。新旧関係は、重複状況よりＳＢ１が新しい。

ＳＢ１（第７図　図版２－１、４－７）

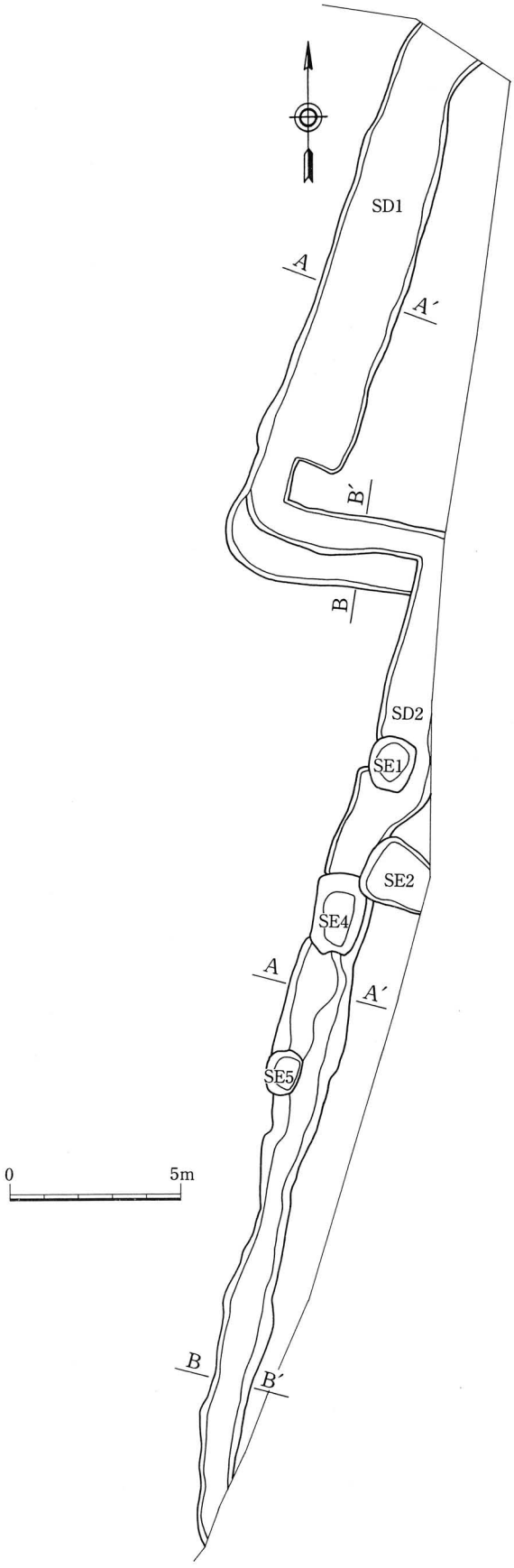
ＳＤ１に西妻柱列を揃える梁間２間、桁行不明の東西棟建物を想定した。妻柱列は16°東偏し、柱間寸法は心々で1.95m（6.5尺）の等間である。柱掘方は円形を基調としたルーズなもので、埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。

ＳＢ２（第７図　図版２－１、４－７）

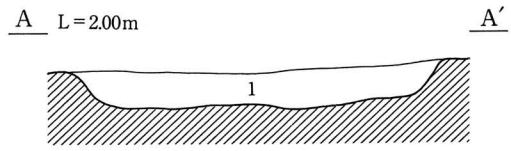
ＳＢ１に切られる梁間２間、桁行１間以上の東西棟建物で、妻柱列は16°西偏する。柱間寸法は心々で梁間1.55m、桁行1.55mの等間であり、１尺を30㎝と換算した場合、基準尺に正数値は得られない。柱掘方は略方形を呈し、埋土は黒色粘質土の単層である。遺物はＰ３より流れ込みで、弥生土器の細片が１点出土している。

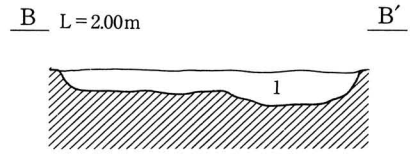


第７図　ＳＢ１・２（１：60）



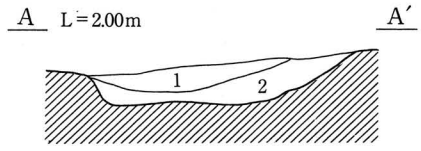
SD1



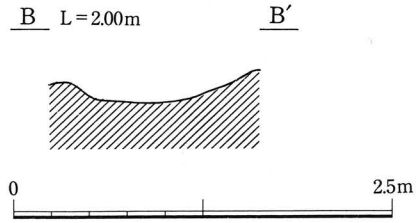


ＳＤ１
1　黒色粘質土

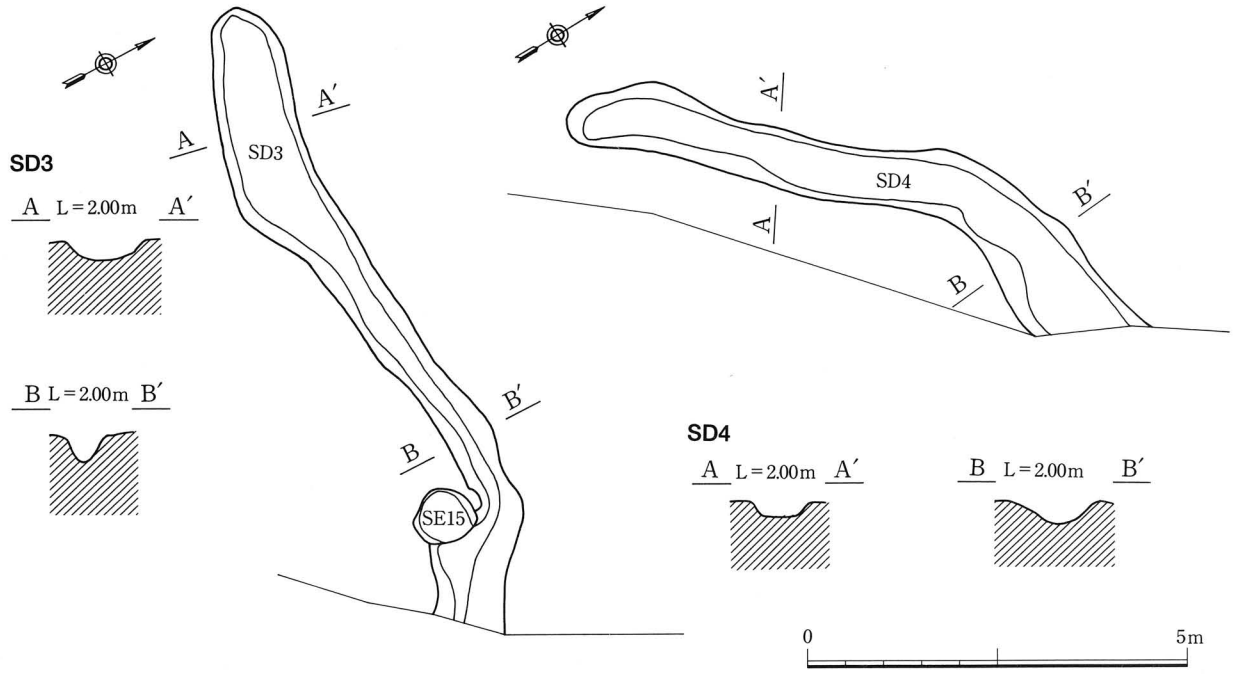
SD2



ＳＤ２
1　黒色粘質土
2　黒色粘質土　青灰色粘土がブロック（φ10～30㎜）で入る。



第８図　ＳＤ１・２（１：200）



第９図　ＳＤ３・４（１：100）

２．溝

４条の溝が検出されている。ＳＤ１とＳＤ２は連結しており、底面の高さは全線でほぼ等しく、走行方向・埋土より一体の機能を有していたと考えられる。

ＳＤ３とＳＤ４は地形の傾斜方向に向かって走り、底面の高さはそれに沿って高さを減じている。

ＳＤ１（第８図　図版２－２・３）

調査区北限りより走り、南へ15m延びた後、東へ折れる「鉤の手」状の溝である。南北の中軸線は19°東偏し、規模は幅2.0～2.3m、深さ15～20㎝を測り、断面形は皿状を呈する。コーナーの内側には、一辺が1.3ｍの方形状の張り出し部を有し、南辺の溝には底面より約10㎝高い幅１ｍの平坦面を構築している。埋土は黒色粘質土の単層で、層中には須恵器と木製品が包蔵されていた。

ＳＤ２（第８図　図版２－４・５）

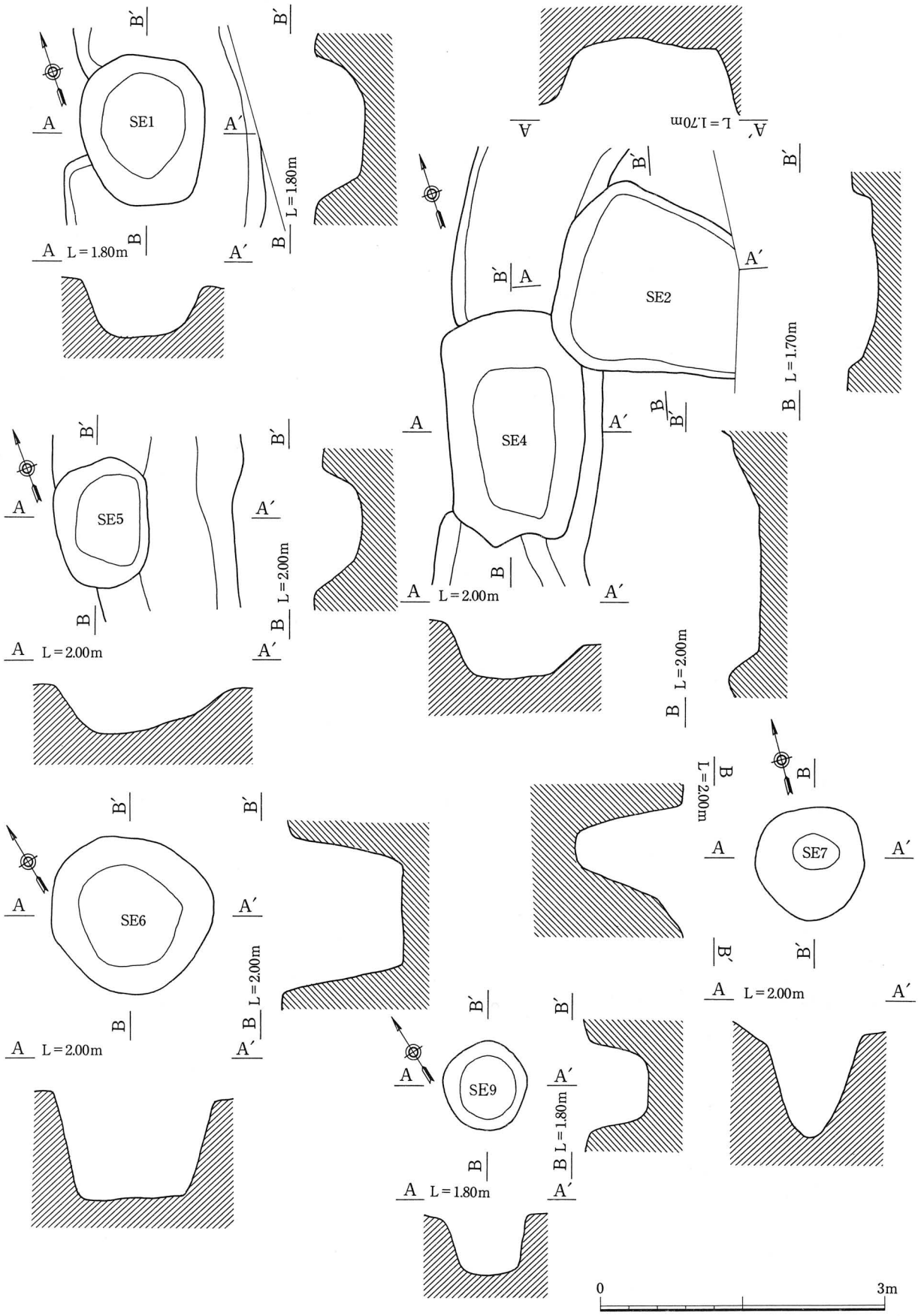
ＳＥ１・２・４・５に切り込まれている。ＳＤ１の南端より続く南北溝で、29.9m走った後に調査区東限りに至る。走行方向は17°東偏し、規模は幅1.1～2.0m、深さ10～20㎝を測り、断面形は皿状を呈する。埋土は黒色粘質土を基調とし、部分的ではあるが青灰色粘土がブロックで入る。遺物は須恵器、珠洲焼、木製品が出土した。

ＳＤ３（第９図　図版３－１）

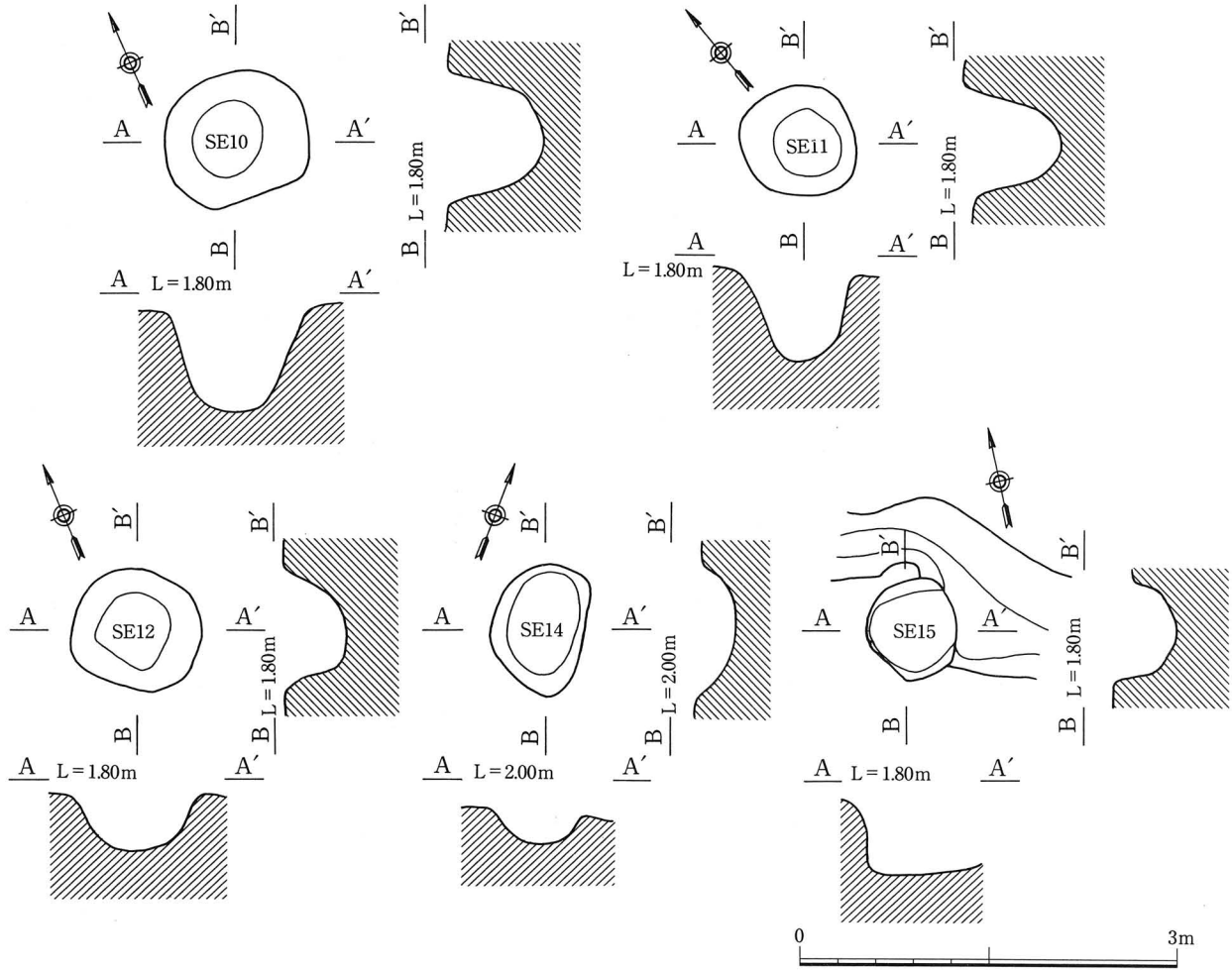
現長９ｍを測る東西溝で、底面は東へ向かって高さを減じ、両端の比高は約40㎝を測る。走行方向は東西軸にほぼ一致し、東端は調査区東限りに至り、西端は調査区中央付近で途絶する。ＳＥ15と重複しているが新旧関係は不明である。規模は幅0.7～1.0m、深さ20～40㎝を測り、断面形は浅い「Ｕ」字状を呈する。埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。

ＳＤ４（第９図）

ＳＤ３の南側に検出された現長８ｍの斜行溝である。底面は東へ向かって高さを減じ、両端の比高は約15㎝を測る。東端は調査区東限りに至り、西端は調査区中央付近で途絶する。規模は幅0.9～1.1m、深さ15～25㎝を測り、断面形は浅い「Ｕ」字状を呈する。埋土は黒色粘質土の単層である。遺物は無かった。



第10図　ＳＥ１・２・４～７・９（１：60）



第11図　ＳＥ10～12・14・15（１：60）

３．井戸跡

包蔵遺物、形態、掘り込み深度より12基の井戸跡を想定した。いずれも素掘りの井戸で、調査区中央部付近（Ｅ～Ｈ－５～８区）に集中して鑿井されていた。

各井戸の規模・形態は、地層が極めて脆弱で湧水が激しかったことにより、原形を正確に留めている可能性は少ないと思われる。

ＳＥ１（第10図　図版３－２）

Ｈ－５区に位置し、ＳＤ２を切り込んでいる。平面形は略楕円形、断面形は皿状を呈し、規模は開口部径1.56×1.30m、基底部径1.10×0.87m、掘り込み0.58m、基底標高1.00mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は木製品が出土した。

ＳＥ２（第10図　図版３－３）

Ｈ－５・６区に位置し、遺構の一部は東限りに入る。ＳＤ２を切り込んでおり、平面形は現状に於て略方形、断面形は皿状を呈する。現状規模は開口部径1.83×1.30m、基底部径1.60×1.60m、掘り込み0.33m、基底標高0.83mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼が出土した。

ＳＥ４（第10図　図版３－４）

Ｈ－６区に位置する。ＳＤ２を切り込みＳＥ２に切り込まれる。平面形は方形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径2.39×1.43m、基底部径1.52×0.82m、掘り込み0.47m、標高1.20mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼、木製品、礫が出土した。

ＳＥ５（第10図　図版３－５）

Ｇ－７区に位置し、ＳＤ２を切り込んでいる。平面形は略方形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.35×0.98m、基底部径0.88×0.65m、掘り込み0.50m、基底標高1.22mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼、越中瀬戸、木製品、礫が出土した。

ＳＥ６（第10図　図版３－６）

Ｆ－６区に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。規模は開口部径1.69×1.63m、基底部径1.11×1.05m、掘り込み1.12m、基底標高0.52mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、砂を不規則に含んでいる。遺物は珠洲焼、木製品が出土した。

ＳＥ７（第10図　図版３－７・８）

Ｇ－５区に位置する。平面形は円形、断面形は摺鉢状を呈する。規模は開口部径1.21×1.13m、基底部径0.50×0.36m、掘り込み0.60m、基底標高0.98mを測る。埋土は有機質の黒色粘質土を基調とし、層中には古代の土師器甕、礫等が包蔵されていた。

ＳＥ９（第10図　図版４－１）

Ｆ－７区に位置する。平面形は円形、断面形は「Ｕ」字状を呈する。規模は開口部径0.94×0.87m、基底部径0.67×0.58m、掘り込み0.66m、基底標高0.98mを測る。埋土は有機質の黒色粘質土を基調とし、出土遺物は無かった。

ＳＥ10（第11図　図版４－２）

Ｆ－７区に位置し、東脇にＳＥ９、西脇にＳＥ11が検出されている。平面形は円形、断面形は「Ｕ」字状を呈する。規模は開口部径1.13×1.05m、基底部径0.62×0.52m、掘り込み0.81m、基底標高0.88mを測る。埋土は有機質の黒色粘質土を基調とし、層中には古代の須恵器が包蔵されていた。

ＳＥ11（第11図　図版４－３）

Ｆ－７区に位置する。平面形は円形、断面形は摺鉢状を呈する。規模は開口部径0.90×0.89m、基底部径0.54～0.51m、掘り込み0.70m、基底標高0.96mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とし、層中には木製品が包蔵されていた。

ＳＥ12（第11図　図版４－４）

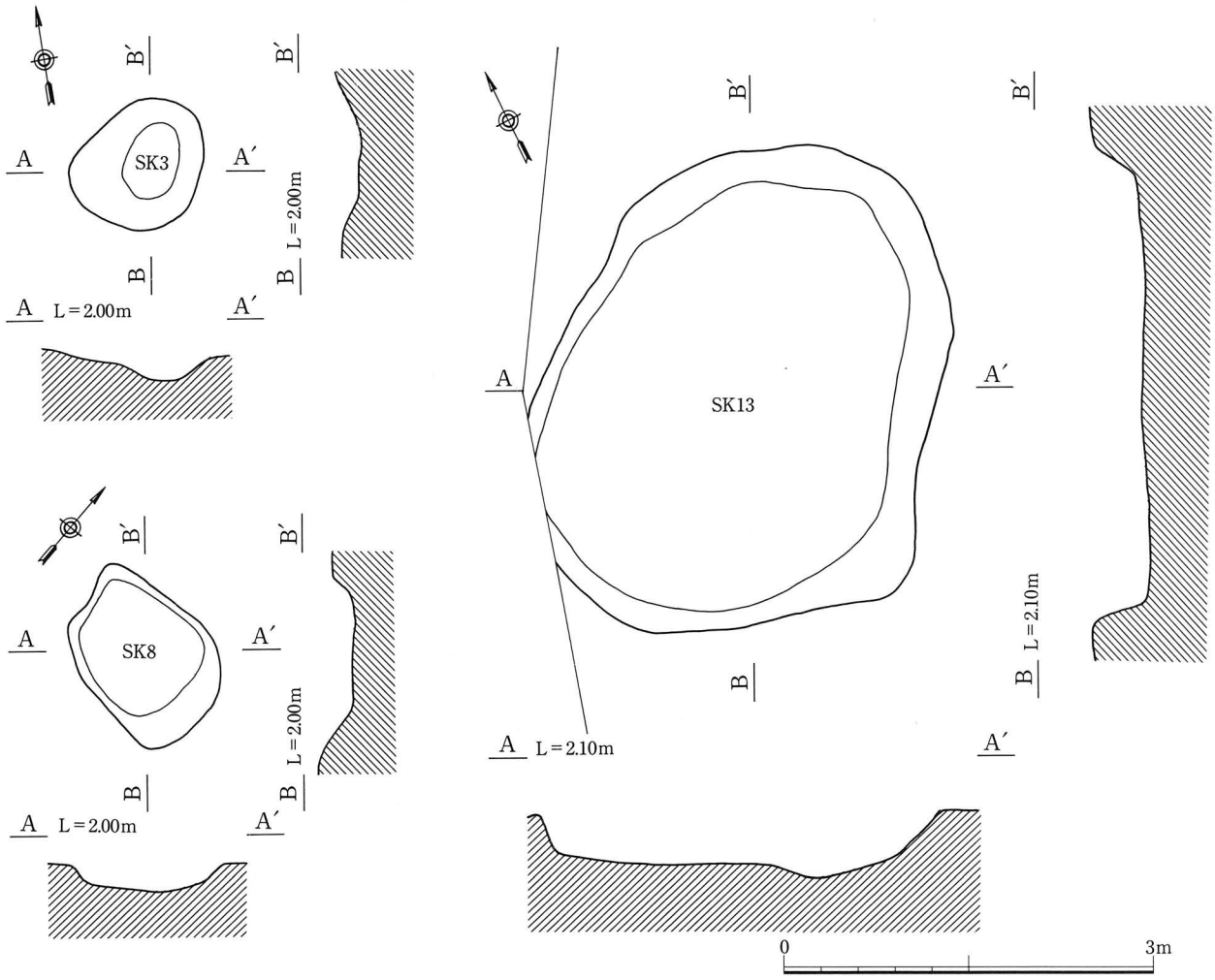
Ｅ・Ｆ－７区に位置する。平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.01×0.92m、基底部径0.55×0.54m、掘り込み0.45m、基底標高1.23mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

ＳＥ14（第11図　図版４－５）

Ｇ－８区に位置する。平面は略円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径1.05×0.75m、基底部径0.82×0.53m、掘り込み0.43m、基底標高1.49mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

ＳＥ15（第11図　図版３－１）

Ｆ－11区に位置し、ＳＤ３と重複しているが、新旧関係は不明。平面形は円形、断面形は「Ｕ」字状を呈する。規模は開口部径0.78×0.70m、基底部径0.60×0.66m、掘り込み0.45m、基底標高1.05mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とし、層中には古代の須恵器が包蔵されていた。



第12図　ＳＫ３・８・13（１：60）

４．土坑

Ｉ・Ｇ－５・６区に於て３基が検出されている。各土坑の基底面は、基本層序の第４層（青灰色粘土）中にあり、第５層（オリーブ灰色粘土）には達していなかった。

ＳＫ３（第12図　図版４－８）

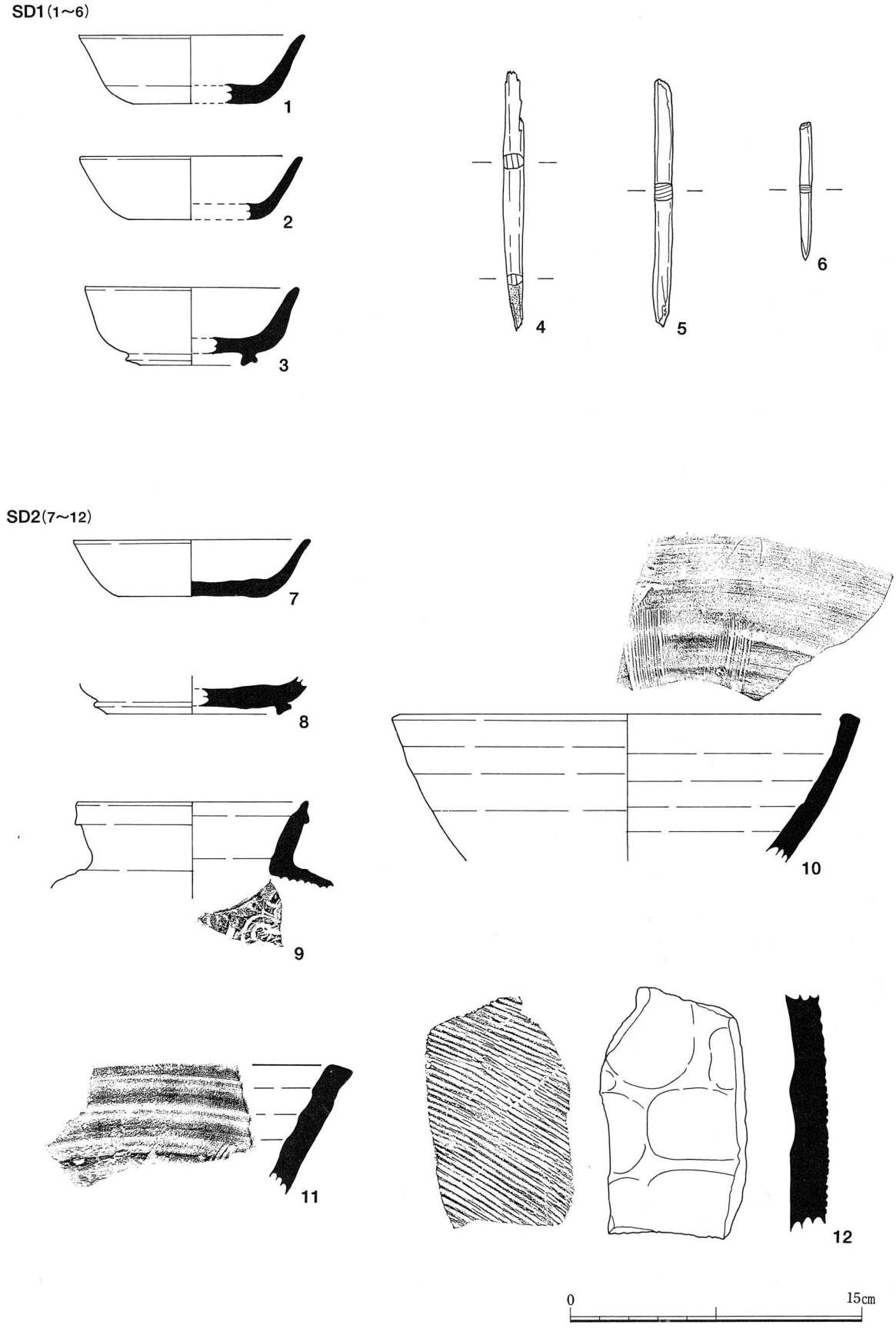
Ｇ－５区に位置し、南脇にＳＥ７が鑿井されている。平面形は略円形で底面は起伏している。規模は上面径1.10×0.95m、下面径0.64×0.41m、掘り込み0.23m、基底標高1.52mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。出土遺物は無かった。

ＳＫ８（第12図）

Ｇ－６区に位置する。平面形は略方形、断面形は皿状を呈する。規模は上面径1.32×1.01m、下面径0.98×0.86m、掘り込み0.24m、基底標高1.59mを測る。埋土は有機質の黒色土を基調とする。遺物は無い。

ＳＫ13（第12図　図版４－６）

Ｆ・Ｇ－５区に位置する。平面形は略方形、断面径は鍋底状を呈し、一部起伏する。規模は上面径3.87×3.28m、下面径3.61×2.83m、掘り込み0.35m、基底標高1.23mを測る。埋土は黒褐色粘質土を基調とし、砂を不規則に含む。遺物は珠洲焼が出土した。



第13図　ＳＤ１・２出土遺物実測図（１／３）

B．遺物

1．溝

ＳＤ１（第13図　図版５）

須恵器３点（１～３）と木製品３点（４～６）を掲載した。１は無台坏で、器高3.4cm、復元口径11.5cm・底径6.0cm、口径指数約30、体部外傾度[註4]64°を測る。体部外面にロクロ撫で顕著。色調は灰白色を呈し、焼成あまい。２は無台坏で、器高3.3cm、復元口径11.2cm・底径6.0cm、口径指数約29、体部外傾度62°を測る。色調は灰白色を呈し、焼成あまい。３は有台坏で、器高4.0cm、復元口径11.0cm・底径5.3cm、口径指数約48、体部外傾度75°を測る。高台は底面に窪みを有し、内端接地となる。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。４～６は箸状の木製品で、いずれも粗雑に４面を加工し、断面形は方形状となる。現存長は順に13.3cm、12.7cm、7.1cmを測る。

時期は、１～３が８世紀中葉～８世紀末と考えられる。

ＳＤ２（第13・14図　図版５）

須恵器３点（７～９）と珠洲焼３点（10～12）、木製品４点（13～16）を掲載した。７は無台坏で、器高3.0cm、復元口径12.0cm・底径7.0cm、口径指数25、体部外傾度60°を測る。底部の切り離しは篦切りで、色調は灰白色を呈する。８は有台坏で、底部及び高台が遺存する。底径は8.7cmを測り、高台は底面に窪みを有し、内端接地となる。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。９は横瓶の口頸部で、復元口径12cmを測る。口縁は断面が三角形状となり、体部内面に同心円文の当て具痕。色調は青灰色を呈し、焼成堅緻。10は片口鉢で、復元口径は24cmを測り、器体は内湾気味に開く。口縁形態は方頭の外傾口縁で、卸し目は一単位幅2.5cm・16目の櫛歯原体が使用され、直線文と考えられる。11は片口鉢で、遺存は1/7程度である。器体は直線的に開き、口縁形態は方頭の水平口縁である。色調は灰白色を呈し、焼成はややあまい。12は甕もしくは壷の胴部片で、内面には方形の押圧痕、外面の打圧密度は３cm当たり９～10目程度である。色調は灰白色で、焼成堅緻。13～15は箸状の木製品で、本と末は不明。いずれも粗雑に６面を加工し、断面形は方形状となる。現存長は順に16.7cm、16.0cm、11.0cmを測る。16は詳細不明な部材片で、木取りは正目。

時期は、７～９が８世紀中葉～８世紀末で、10は吉岡編年のⅡ期に比定されよう。

2．井戸跡

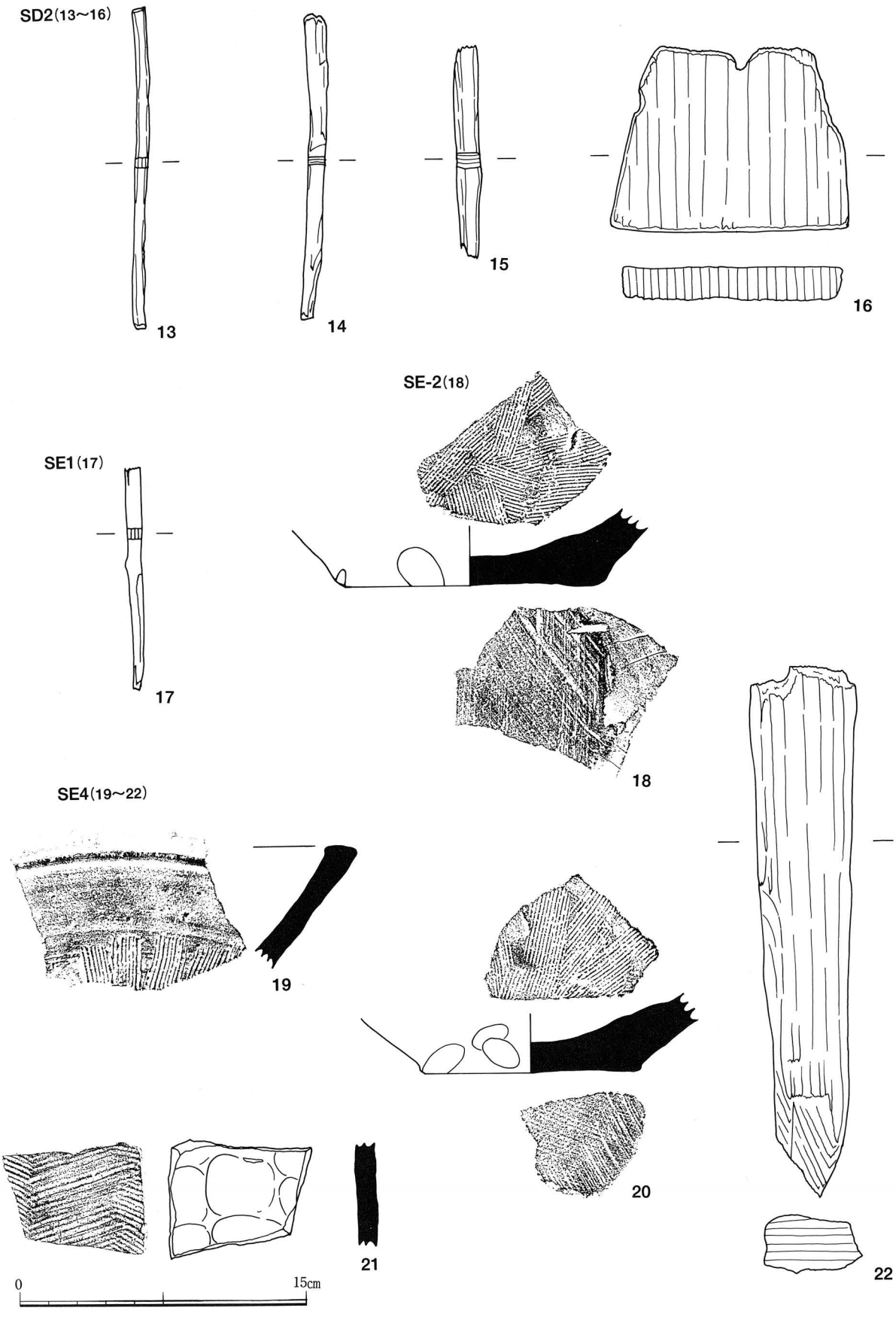
ＳＥ１（第14図　図版６）

木製品１点（17）がある。17は箸状の木製品で、末は丁寧に、本は粗雑に４面を加工し、現存長11.6cmを測る。

ＳＥ２（第14図　図版６）

珠洲焼１点（18）がある。18は片口鉢で、内底面に稠密な卸し目が認められる。卸し目は一単位幅2.5cm・15目の中太櫛歯原体が使用され、外底の粗い静止糸切り痕を細かい刷毛状器具で撫でている。復元底径は14cmを測り、色調は灰白色を呈する。

時期は、吉岡編年のⅣ期であろうか。



第14図　ＳＤ２、ＳＥ１・２・４出土遺物実測図（１／３）

ＳＥ４（第14図　図版６）

珠洲焼３点（19～21）と木製品１点（22）がある。19は片口鉢で、口縁はやや肥厚気味の水平口縁であり、卸し目は一単位幅1.5cm・８目の中太櫛歯原体が使用される。20は18と同一個体の片口鉢である。21は甕もしくは壺の胴部片で、綾杉状の打圧痕は３cm当たり12目を数え、色調は鼠黒色を呈する。内面に方形の押圧痕顕著。22は杭状の木製品で、現存長27.5cmを測る。

時期は、19～21が吉岡編年のIV2期と思われる。

ＳＥ５（第15図　図版６）

珠洲焼２点（23・24）と越中瀬戸１点（25）、木製品１点（26）を掲載した。23は甕の口頸部片で、口縁形態は方頭の「くの字」口縁である。叩打が頸基部直下より施され、基部の撫で回しが弱く、３cm当たりの打圧密度は15目である。24は甕もしくは壺の胴部で、３cm当たりの打圧密度は12目である。25は壺で、復元口径14cmを測り、茶色の鉄釉を施す。26は板状の木製品で、残存長12.1cm・幅1.8cm・厚さ0.7cmを測る。

時期は、23が吉岡編年のb期で、25は17世紀代と考えられる。

ＳＥ６（第15図　図版６）

須恵器１点（27）と、木製品１点（28）を掲載した。27は甕の胴部片で、内面に同心円文の当て具痕、外面に平行の叩き目。色調は灰白色を呈し、胎土は緻密。28は詳細不明な板状の木製品で、残存長7.7cm・幅3.0cm・厚さ0.8cmを測る。

ＳＥ７（第15図　図版７）

土師器１点（29）がある。29は甕の体部片で、内面にカキメの後ハケ目、外面上半にカキメ、下半にハケ目が施される。内外面及び破断面に煤が付着している。砂粒多く含む。

時期は、８世紀中葉以降と考えられる。

ＳＥ10（第15図　図版７）

須恵器１点（30）がある。30は甕の体部片で、内面に同心円文の当て具痕、外面に格子状のタタキ目が認められる。胎土は緻密で色調は灰白色を呈する。

ＳＥ11（第15図　図版７）

木製品１点（31）を掲載した。31は角棒状の木製品で、端部の一面が炭化している。規模は、現存長26.0cm・幅3.0cm・厚さ1.9cmを測る。

ＳＥ15（第15図　図版７）

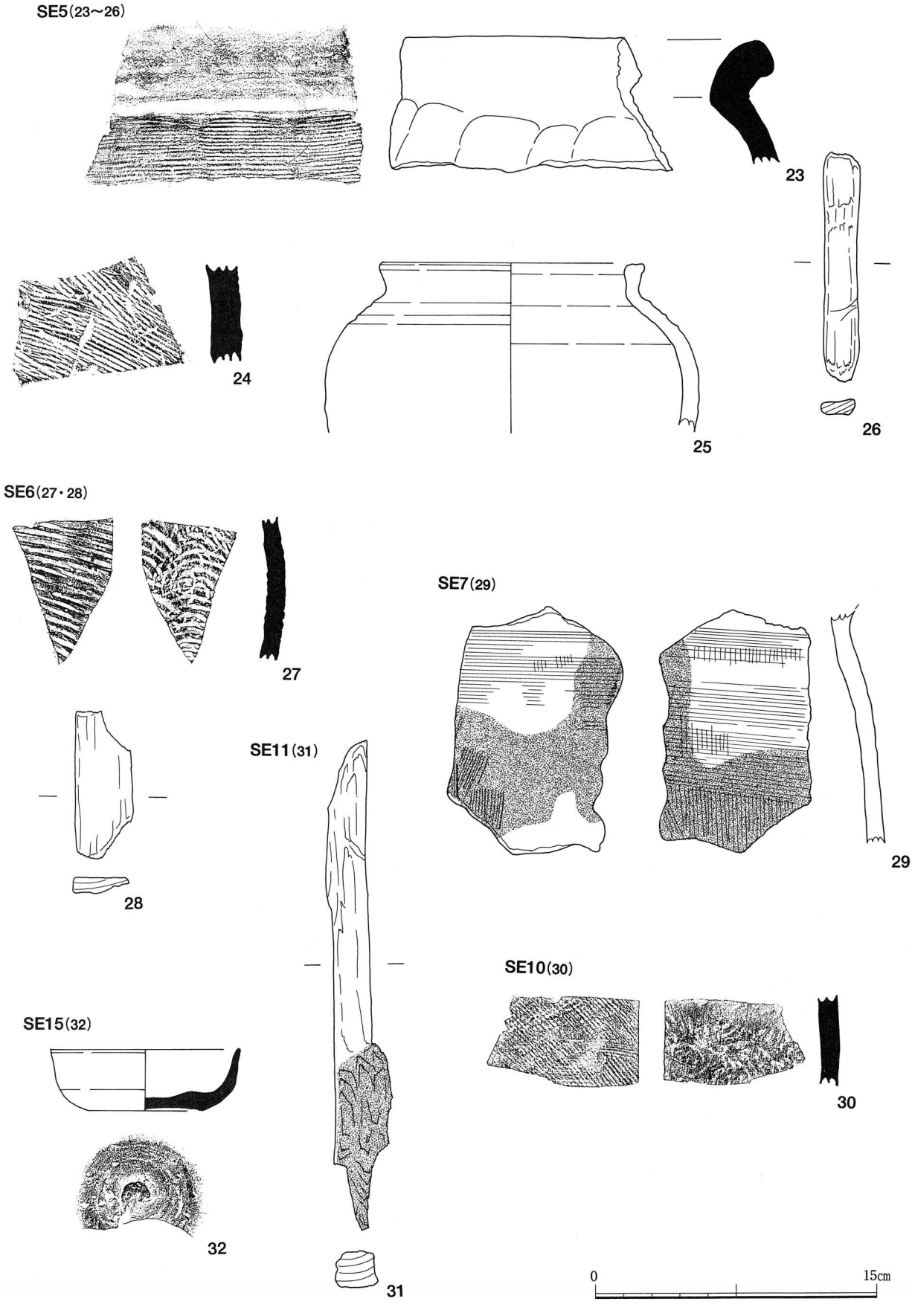
須恵器１点（32）がある。32は無台坏で、遺存は3/4程である。底部の切り離しはヘラ切りで、器高3.3cm・口径10.2cm・底径6.0cm、口径指数約32、体部外傾度76°を測る。胎土に長石粒・石英を多く含み、器面に火膨れ状の突起が顕著である。色調は青灰色を呈する。

時期は、８世紀中葉～８世紀末と考えられる。

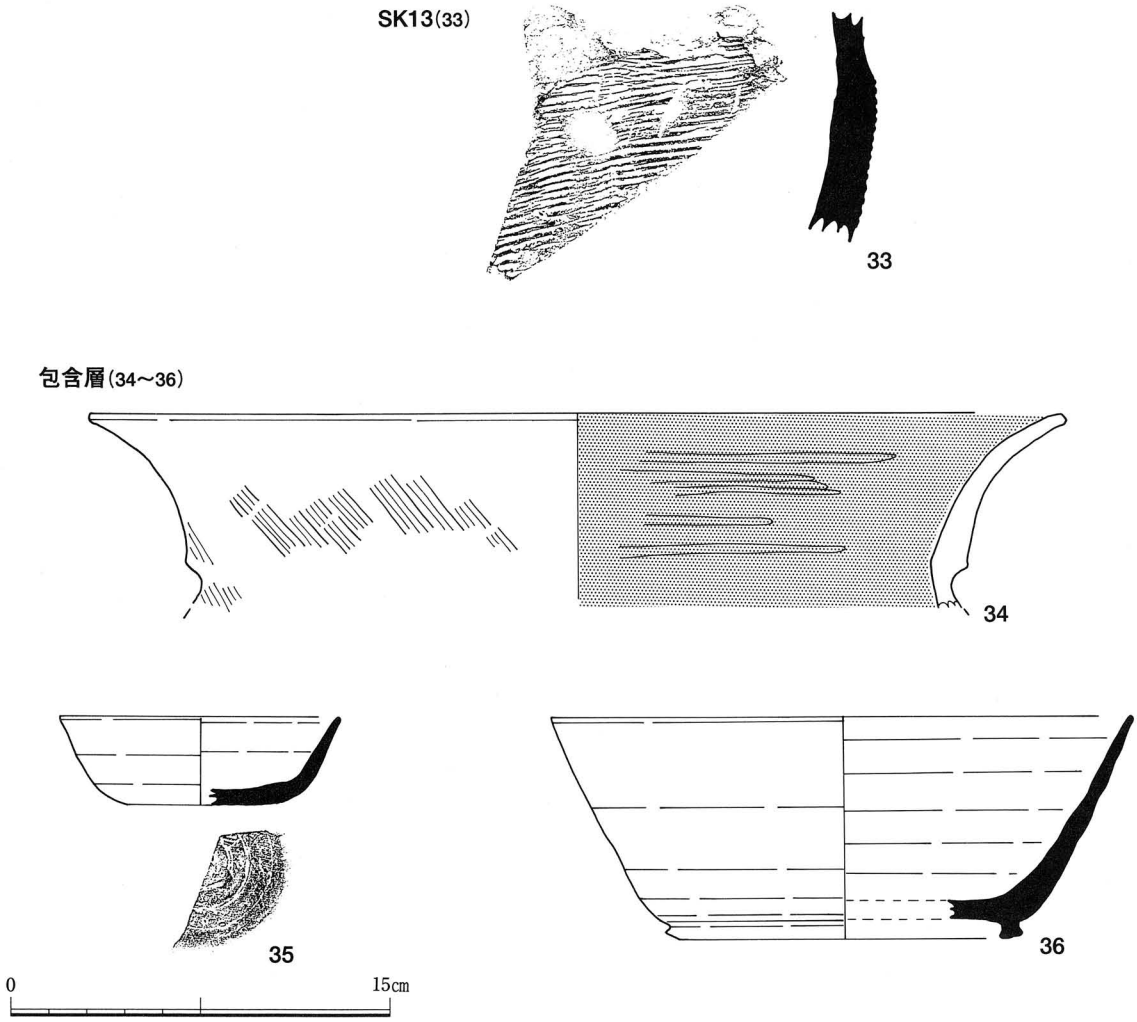
３．土坑

ＳＫ13（第16図　図版７）

珠洲焼１点（33）がある。33は甕もしくは壺の胴部片で、内面に方形の押圧痕、外面の打圧密度は３cm当たり12目前後である。



第15図　ＳＥ５～７・10・11・15出土遺物実測図（１／３）



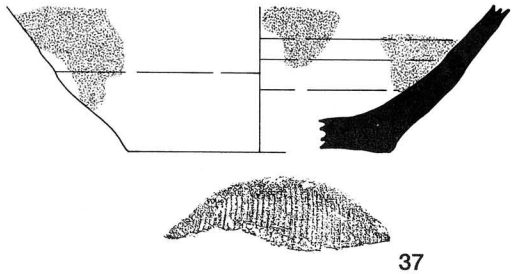
第16図　ＳＫ13、包含層出土遺物実測図（１／３）

４．包含層（第16・17図　図版７）

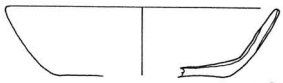
いずれも基本層序第３層（黒色土）に包蔵されていた。検出された遺物は、弥生土器１点（34）、須恵器２点（35・36）、珠洲焼１点（37）、貿易陶磁器１点（38）、木製品２点（39・40）である。34は高坏の坏部で、１／３程遺存する。復元口径は38cmを測り、口縁部は外反して伸びる。内面はヘラミガキに赤彩、外面にハケ目を施す。35は無台坏で、遺存は1/3程である。底部の切り離しはヘラ切りで、器高3.5cm・復元口径11.1cm・底径5.6cm、口径指数約32、体部外傾度60°を測る。色調は灰白色を呈する。36は有台坏で、遺存は1/4程である。高台は内側に下がって傾斜し、端部は面を成す。体部は直線的に開き、器高8.8cm、復元口径23.0cm・底径12.6cm、口径指数38、体部外傾度59°を測る。色調は青灰色を呈する。37は片口鉢で、底部の切り離しは静止糸切りである。復元底径は10.5cmを測り、内外面に煤の付着が著しい。38は口禿の白磁皿で、遺存は1/3程である。釉調はやや青みをおびる白色で、胎土は灰色。39は棒状の木製品で、断面が六角形を意図して工作されている。両端の太さを比較すると、片方がやや細く仕上げられ、加工は比較的粗雑である。規模は、長さ20cm・幅2.5cm・厚さ2.0cmを測る。木取りは芯持材。40は断面が四角の杭で、端部は３面を荒く加工して尖る。規模は、長さ34.1cm・幅3.7cm・厚さ2.8cmを測る。

時期は、35・36が８世紀中葉～８世紀末で、38は14世紀前半と考えられる。

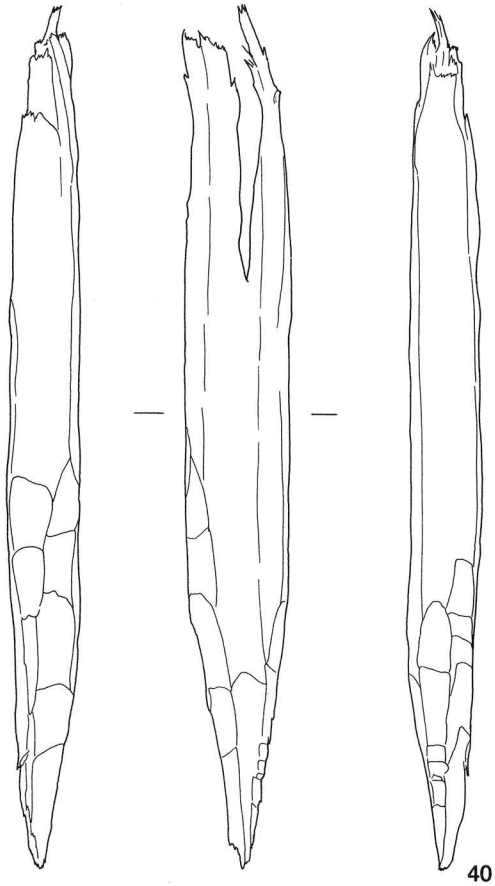
包含層(37～40)



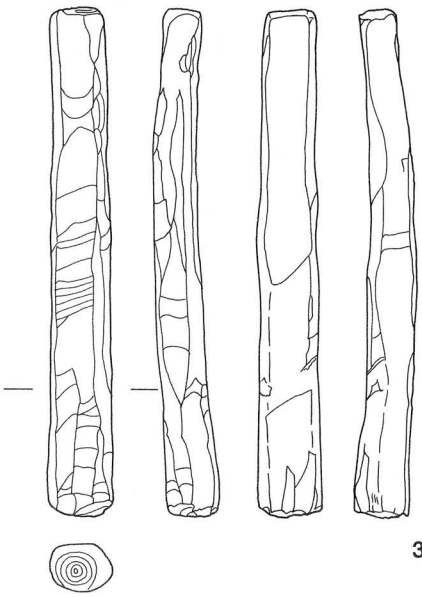
37



38



40



39

第17図　包含層出土遺物実測図（１／３）

Ⅵ. まとめ

1．概観

水橋荒町遺跡は、常願寺川と白岩川に挟まれた標高2.5m前後を測る扇状地の末端に立地し、現在周知されている遺跡範囲は579,000㎡に及んでいる。今回調査が実施された地区は、この南東端に位置する約820㎡の範囲である。この地点より北西へ約600m付近（現在水橋浄化センター）では、富山市教育委員会により平成3年から5年度にかけて約10,400㎡の発掘調査が実施されており、多くの知見が明らかになりつつある。

『富山県埋蔵文化財センター所報　40・44』[註1]によれば、縄文時代中期から近世に亘る大規模な複合遺跡であり、その中で最も盛行したのは奈良・平安時代と考えられている。奈良・平安時代に於ける特質事項として、古代の正倉であった可能性を有する建物を含む掘立柱建物群や、それを囲繞・区画する大溝、そして堅牢な木組井戸等が検出されている。これらは計画的に構成されており、遺跡の性格は『延喜式』兵部省に見える越中国八駅の一つである「水橋駅」の可能性が指摘されている。

2．遺構

検出された遺構は、掘立柱建物2棟、溝4条、井戸跡12基、土坑3基である。各遺構の詳細は「Ⅴ・A」で述べた通りであり、以下に各遺構の概要と大過なかろうと思われる範囲での年代観について触れる。

掘立柱建物は2棟として捉えたが、桁行の大半が調査区外に延びており、平面規格等については不明である。ＳＢ１は今妻川をＳＤ１に揃える梁間2間の東西棟建物で、ＳＢ２を切り込んで構築され、柱間寸法は心々で1.95m（6.5尺）の等間である。ＳＢ２は梁間2間、桁行1間以上の東西棟建物で、柱間寸法は梁間・桁行とも心々で1.55mの等間である。いずれもＳＤ１に囲繞されており、ＳＤ１との強い相互関連が想定される。

溝は便宜上4条として捉えた。ＳＤ１とＳＤ２は連結しており、走行方向・埋土より一体の機能を有したと判断される。しかしながら、平面形は規格的なＳＤ１に比べＳＤ２はルーズなものとなっており、一つの可能性として構築時期の差が考えられる。性格は定かではないが、ＳＢ１・２を含む西方向に展開するであろう何らかの遺構群を囲繞する区画・排水溝の可能性が高い。ＳＤ３・４は地形の傾斜方向に沿って構築されており、規模・形状は両溝ともルーズなものである。時期は、ＳＤ１・２が8世紀中葉から8世紀末と考えられる。

井戸跡はいずれも素掘りであり、12基として捉えた。井戸跡とした主な理由は、井戸祭祀に使用されたと推察される土器、木製品類、礫等の埋納遺物の出土と、基底面がオリーブ灰色粘土層（湧水層）まで達していることである。各井戸は、地層が極めて脆弱で湧水が激しかったことにより、原形を正確に留めている可能性は少ないと思われる。時期は、ＳＥ７・15が8世紀中葉～8世紀末、ＳＥ２・４が13世紀末～14世紀初頭でＳＥ５が14世紀後半～15世紀前半と考えられる。なお、ＳＥ５より出土した越中瀬戸は、出土状況より当遺構に伴わない可能性が高い。

3．遺物

遺物は古代と中世を主体とし、極少量の弥生土器と越中瀬戸が出土している。土器以外には、木製品類と礫が出土しているが、その多くは井戸祭祀に起因するものと考えられる。井戸跡以外にもＳＤ１・２より箸状木製品と礫が出土しているが、井戸跡と重複関係にあることより、井戸跡に伴う可能性が高い。

弥生土器としては、包含層（第3層）より出土した高坏1点（34）がある。時期は、概ね北加賀地域に於ける編年〔谷内尾1983〕の法仏式（弥生後期）に相当すると思われる。

古代の土器としては、須恵器（無台坏・有台坏・甕）、土師器（甕）がある。32を除く無台坏は、口径指数は25～32、体部外傾度は60～64°を測り、有台坏は高台端面が内側に下がって傾斜する内端接地のものである。土師器甕（29）は体部片で、内外面にカキメが施されている。時期は、いずれも８世紀中葉～８世紀末と考えられる。

中世の土器としては、珠洲焼（甕・壺・片口鉢）、白磁皿がある。珠洲焼の甕（23）は、叩打が頸基部直下より施され基部の撫で回しが弱く、吉岡編年Ⅴ期の特徴を有する。片口鉢（10）は、体部が内湾気味に開き、口縁形態は方頭の外傾口縁で、卸し目は一単位幅2.5㎝・16目の細密な櫛歯原体を使用しており、吉岡編年Ⅱ２期と考えられる。同じく片口鉢の19は、体部は直線的に開き、口縁はやや肥厚気味の水平口縁で、卸し目は一単位幅1.5㎝・８目の中太櫛歯原体を使用しており、吉岡編年Ⅳ２期と思われる。他の珠洲焼は、遺存状況の乏しさより定かではないが、吉岡編年Ⅳ期の範疇にあると考えられる。

以上のように当遺跡は、８世紀中葉～８世紀末、そして13世紀末～15世紀前半代に構築された遺跡であることが判明した。冒頭でも述べた通り、当遺跡より北西600m付近では現在発掘調査及び整理調査が進行しており、更なる知見が明らかになりつつある。よって、当地区の性格は、それらの成果を踏まえたうえで改めて考察する必要があろう。

註・引用文献

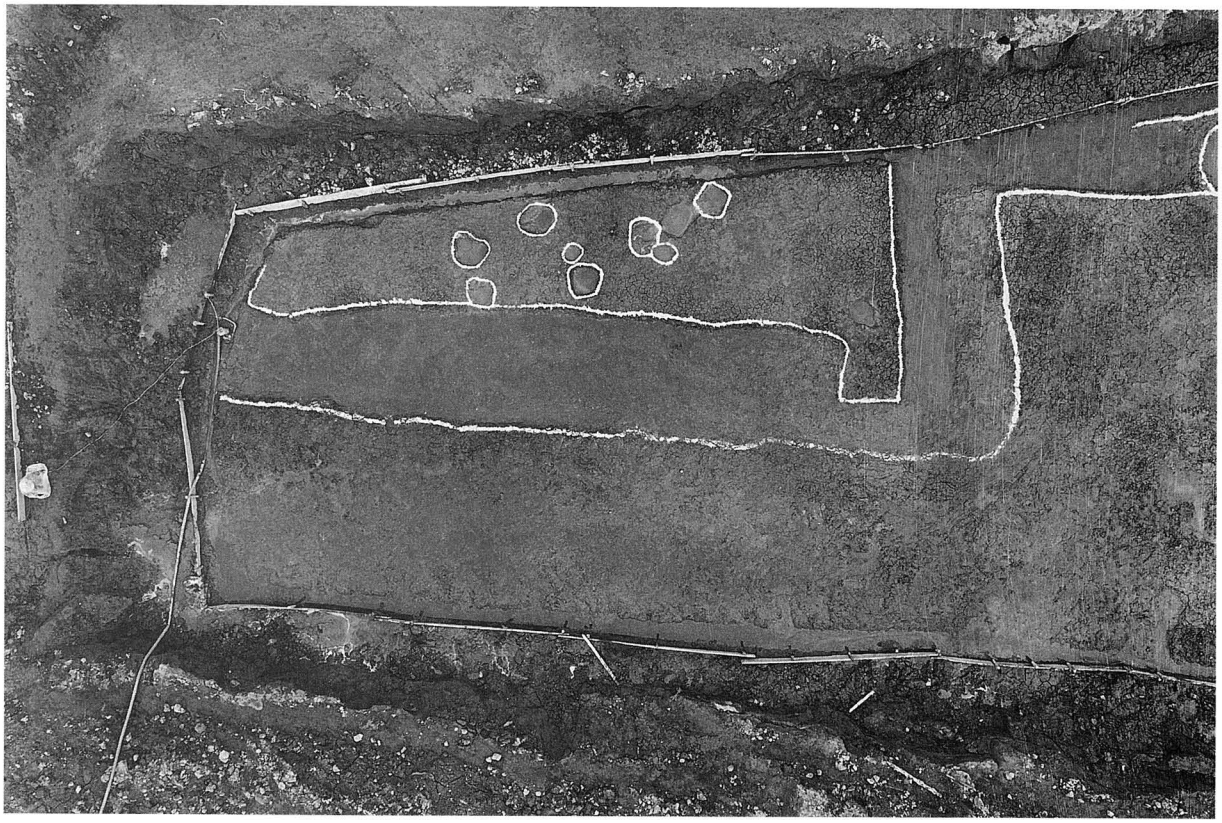
1　富山県埋蔵文化財センター「水橋荒町遺跡」『富山県埋蔵文化財センター所報　第40・44号』　1992・1993
2　吉岡康暢　『中世須恵器の研究』吉川弘文館　1994
3　橋本　正・斉藤　隆他　『南田中Ｄ遺跡発掘調査報告書』　富山県埋蔵文化財センター　1991
4　坏の体部外傾度については、器高の三分の二地点より上で計測している。

図版1

1．調査区遠景（空撮）

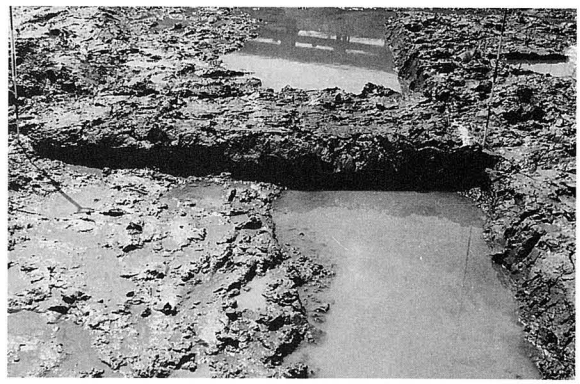
2．調査区全景（空撮）

図版 2

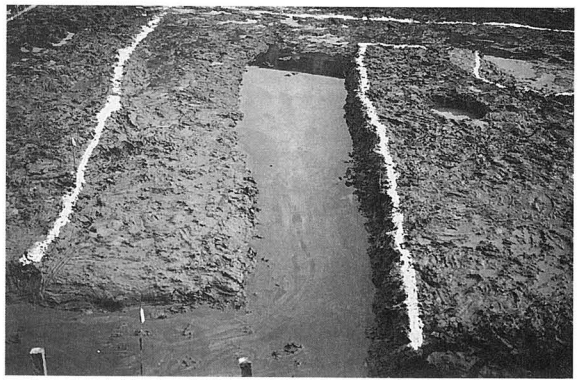


1．ＳＢ１・２、ＳＤ－１（空撮）

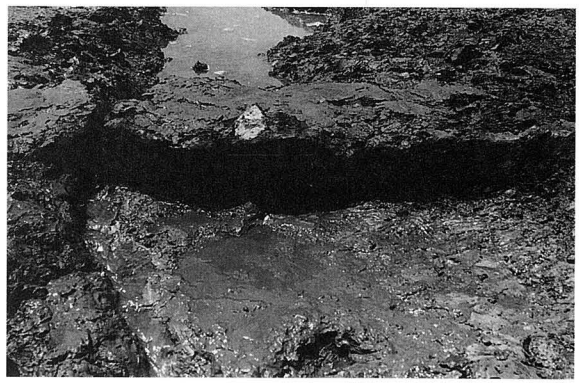
2．ＳＤ１、ＳＢ１・２（北より）



3．ＳＤ１断面（東より）

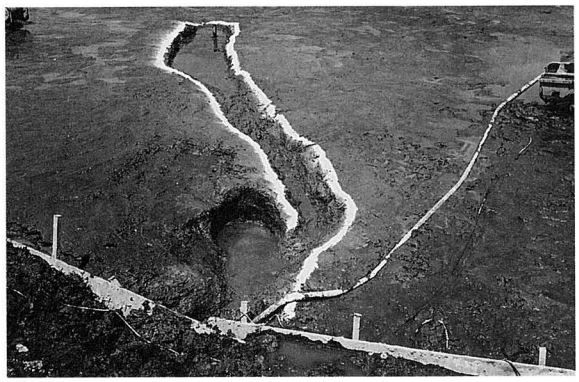


4．ＳＤ２（東より）



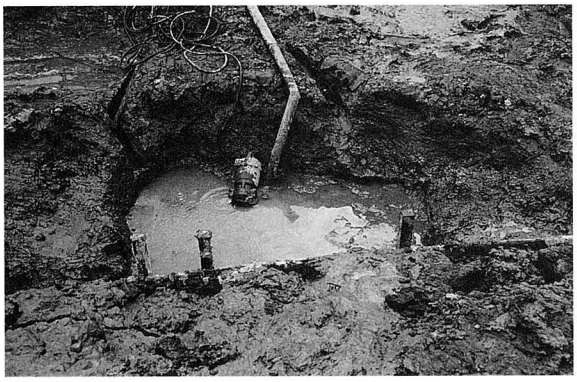
5．ＳＤ２断面（北より）

図版 3



1．ＳＤ３、ＳＥ15（東より）

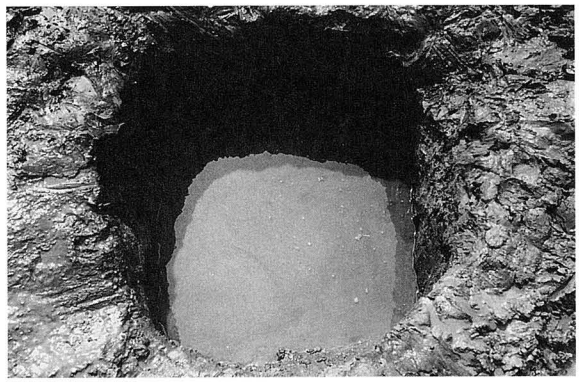
2．ＳＥ１（東より）



3．ＳＥ２（東より）

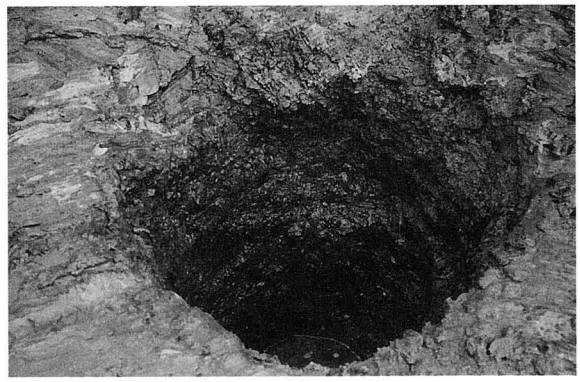
4．ＳＥ４（北より）

5．ＳＥ５（南より）



6．ＳＥ６（東より）

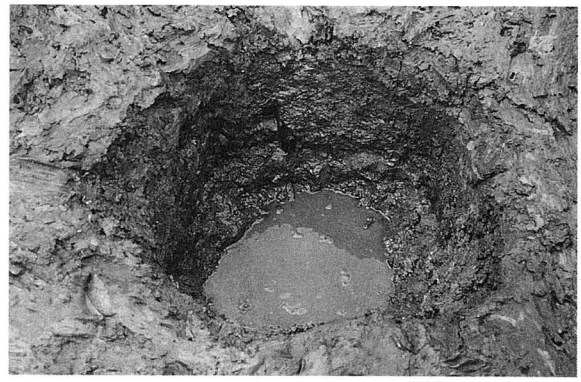
7．ＳＥ７（南より）



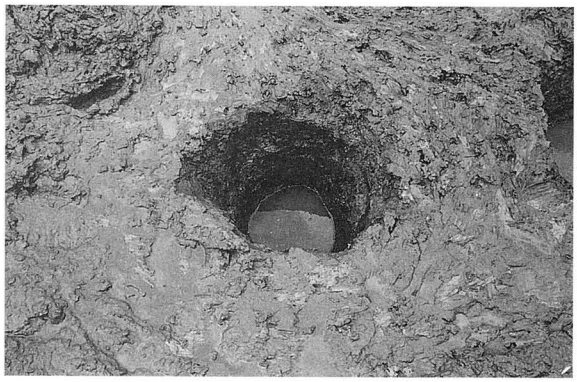
8．ＳＥ７近景

図版 4

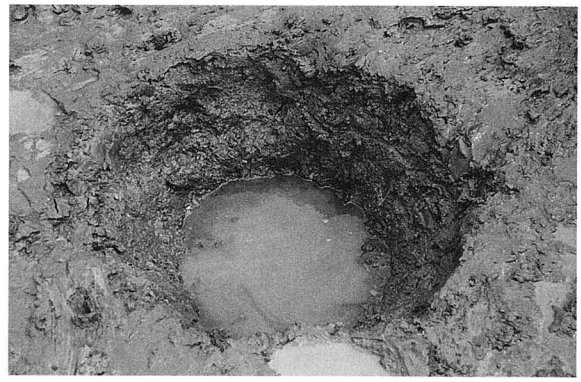
1．ＳＥ９（南より）



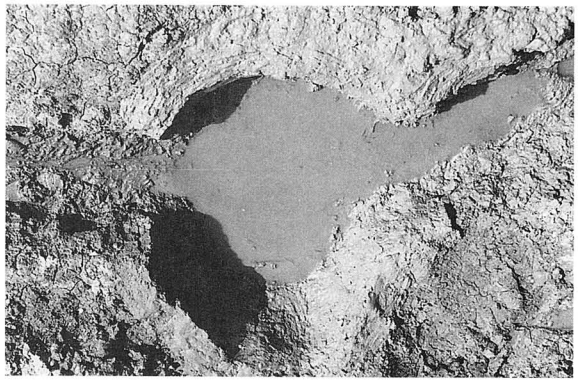
2．ＳＥ10（南より）



3．ＳＥ11（南より）

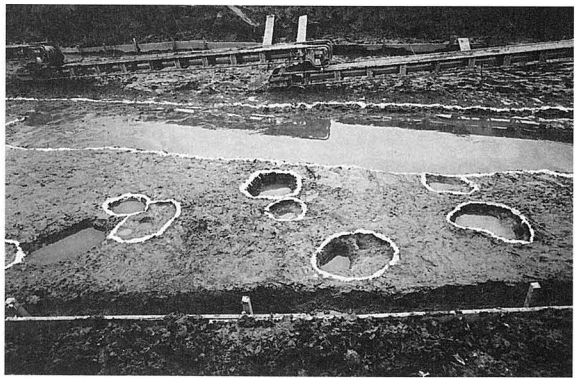


4．ＳＥ12（北より）



5．ＳＥ14（北より）

6．ＳＫ13（北より）



7．ＳＢ１・２（東より）

8．ＳＫ３（東より）

SD 1

1

2

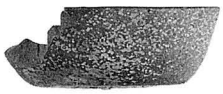
3

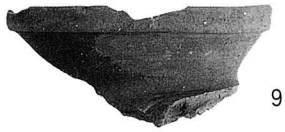
4

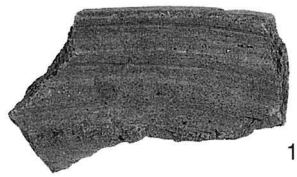
5

6

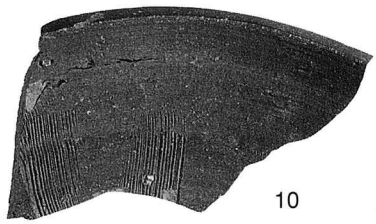
SD 2


7


9


11

8

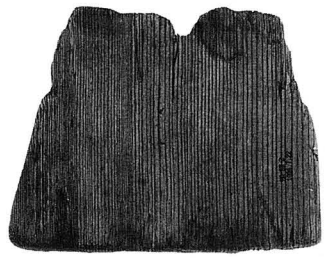

10

12

13

14

15


16

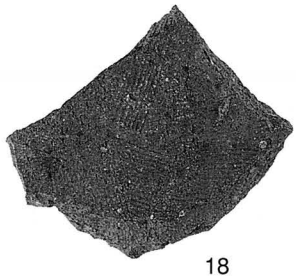
SD 1・2　出土遺物

図版 6

SE 1

17

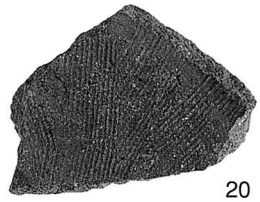
SE 2



18

SE 4

19

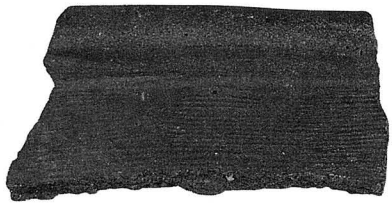


20

21

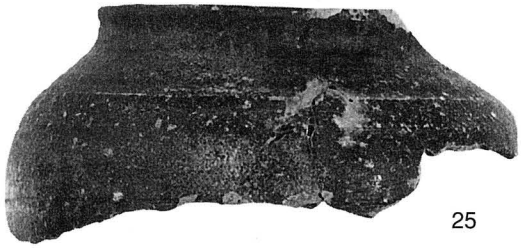
22

SE 5



23

24



25

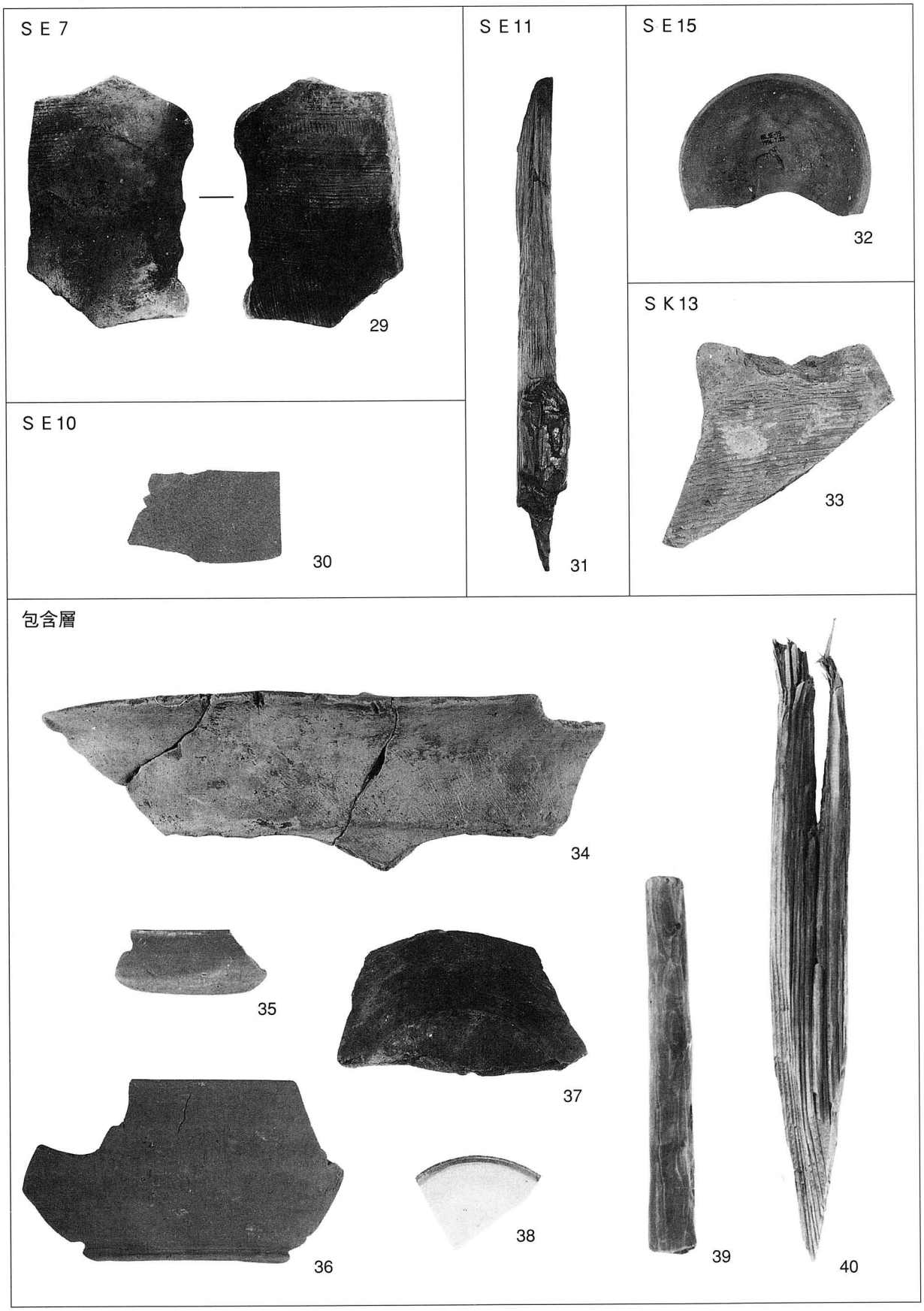
26

SE 6

27

28

SE 1・2・4～6　出土遺物



ＳＥ７・10・11・15、ＳＫ13、包含層出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ミズハシアラマチイセキ
書名	水橋荒町遺跡
副書名 シリーズ番号	病院施設等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	古川知明・桐谷　優
編集機関	山武考古学研究所／〒286　千葉県成田市並木町221番地　☎0476－24－0536
発行機関	富山市教育委員会／〒930　富山県富山市新桜町７－38　☎0764－43－2138
発行年月日	西暦1997年10月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミズハシアラマチ イセキ 水橋荒町遺跡	トヤマケントヤマシミズハシツジガドウ 富山県富山市水橋辻ヶ堂 408番地内	16201	044	36度 44分 34秒	137度 17分 78秒	19960624 ～ 19960731	820	病院施設 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水橋荒町遺跡	集落跡	弥生時代		高坏	方形状に廻ると予想される溝の内側より掘立柱建物跡が検出される。
		奈良時代	溝　2条 井戸跡　4基 掘立柱建物　2棟	須恵器　：甕・無台坏・有台坏・横瓶 土師器　：甕 石　：自然礫	
		中世	井戸跡　3基 土坑　1基	珠洲焼　：甕・壺・片口鉢 中国陶磁：皿 木　器　：箸状木製品 石　：自然礫	
		近世		越中瀬戸：壺	
		時期不明	溝　2条 井戸跡　5基 土坑　2基	木　器　：杭	

病院施設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市水橋荒町遺跡

平成９年10月31日

発　行　富山市教育委員会
富山県富山市新桜町7－38

編　集　山武考古学研究所
千葉県成田市並木町221

印　刷　㈱文化総合企画